

永正十六年八月十五日

三五四

ス、親ハ子ヲ捨、子ハ親ヲ捨、何國モ不知逃行候ト云、早雲聞、不便ニ思ヒ、孟子ニ大人ハ赤子ノ心ヲ不失云云、情ハ非爲人、彼等ヲ捨テ敵ニ向ハ、病人皆死ヘシ、醫師ニ仰セ良藥ヲ與、五百人ノ軍兵モ是ヲ看病スル故、一人モ不死、五三日ノ内ニ皆本復シ、御恩賞何ノ世ニカハ可報トテ、山林へ逃隱タル者モ皆歸リ、早雲ニ歸伏シ、近邊ノ武士トモ悉ク味方ニ馳參シ、關戸播磨守ヲ討取テ、伊豆ノ國即時ニ治ル、新九郎住國山城ノ宇治、或ハ大和國在原ノ人ト申スハ異説ナリ、抑此伊勢平氏ノ先祖ヲ申スニ、桓武天皇第五ノ王子一品葛原ノ親王第二ノ御子高見王ノ子息上總介高望王ニ、始メテ平ノ姓ヲ賜リ、子孫平氏トシテ武家ニ下ル、清盛ノ一門是也、然ルニ清盛惡逆ナリシ故、壽永・元曆ノ間ニ頼朝卿興テ、門葉悉ク滅ビ、平氏永ク絶ヌ、然レモ清盛ヨリ五代ノ祖從四位下越前守正度ノ次男右京亮季衡ト云、正度ノ嫡男ハ清盛ヘツ、キ、季衡ノ長男ヲ右京進盛光ト云、今新九郎ノ先祖是ナリ、盛光ノ子右兵衛尉盛行ハ、平家没落ノ比、病氣故都ニ留リ、無程逝去セリ、子息盛長并ニ攝津守恒平等ハ頼朝へ召出サレ、文治五年奥州下向時御供致シ、忠戰ヲ抽ス、其後都へ上リ、院參シテ從四位下ニ敍セラレ、兵庫助ニ任シテ、本國ナレハトテ、伊勢ノ國ニ居住シ、鎌倉へ出仕ス、其ヨリ三代伊勢守俊繼、正應二年ノ春、豊前守ニ任シテ中國ニ下リシ時、始テ伊勢ヲ名字トシ、伊勢豊前守ト號

關戸播磨守ヲ討取ル  
伊勢平氏

右京進盛光

俊繼伊勢氏ヲ稱ス

ス、其後關東へ召寄ラレ、射禮・弓馬ノ式法等仰セ付ラル、此時又伊勢守ニ任シテ伊勢伊勢守ト號ス、其子盛繼ハ足利殿ノ縁者タリシカハ、元弘ノ兵亂ニ、尊氏將軍上洛ノ時、御供致シテ忠功ヲ勵ス、サレハ盛繼ハ天性細工ノ妙ヲ得、其比大坪道禪ト云人有テ、鞍ヲ作り鏡ヲ打ツ事、恰モ天工ヲ得テ、世ニ無双名人トカヤ、然ルニ、此道禪遍ク諸國ヲ廻リ、弟子ヲ求ルニ、盛繼ニ優ル人ナシトテ、鞍鏡ノ妙工ヲ悉ク相傳ス、是ヨリシテ、伊勢守ノ家ニ此細工ヲ專トス、尊氏公ノ若君餘多出來給フト雖モ、皆短命ニシテ逝去シ給フ、尊氏公愁歎ノ時節、或夜ノ夢ニ、當家ノ先祖平家ヲ悉ク滅シ給フ、其報忽チ來リテ子孫長命ナラズ、世ニ名アル平氏ヲ召寄、國家ノ政ヲ執行ハシメハ、子息長命ナルヘシト見テ、夢ハ即チ覺ヌ、尊氏公悅ヒ給ヒ、天下ノ平氏ヲ尋給フニ、伊勢守盛繼ニ優ル者ナシトテ、近臣ニ被成ケル、其後若君誕生ノ時、盛繼墓目ノ役ヲ勤メラレシヨリ、若君繁昌アリシトテ、御名付親ニ被成、ソレヨリ公方代々彼例ニ任セ、御子誕生ノ時ハ、必ス伊勢守ノ家ヨリ御名ヲ付シト也、盛繼ノ子息伊勢肥前守盛經、元弘ノ合戰ニ手越河原ニテ討死シケレハ、其弟勘解由左衛門、彼忠功ニテ伊勢守ニ任ジテ、寶篋院殿ノ近習奉行引付ノ頭人タリ、後ニハ執事ニ代リ事ヲ勤、盛繼法名ハ照禪、彼道禪ガ一ノ弟子ニテ、作ノ鞍ノ元祖也、サレハ伊勢守ノ家ハ管領家ニモ不劣出頭シ奉ル、然ルニ、

永正十六年八月十五日

三五五



伊勢貞藤  
伊勢ニ下  
ル

宗瑞モ亦  
下ル

少年時代  
ノ行動

尊氏將軍ヨリ八代ノ孫ヲ義政將軍ト云、慈照院東山殿ト號ス、初メ御子アラザリシ時、御弟淨土寺ノ義尋ヲ還俗セシメ、養子トシ、左馬頭義視ト改メ、今出川殿ト號ス、天下ヲ讓ラント契約アツテ、細川勝元ヲ義視ノ執事トシ給フ、其後義政ノ御臺所男子ヲ産給ヒ、公方相續ノ旨ヲ山名宗全（持世）ニ仰付ラル、是ニ依テ細川ト山名ト大ニ異論出來テ、天下亂ル、世ニ應仁ノ亂ト云是也、其比伊勢守貞親、政道ヲ執行フ、貞親ノ弟伊勢備中守貞藤、彼亂ノ時山名入道ト深キ知音ナリシ故、細川右京大夫勝元是ヲ惡、公方ヘ讒ケレハ、ヒソカニ花ノ御所ヲ忍ヒ出テ、伊勢國ヘ下ル、義視公モ御身ノ上無覺束思召テ、北畠ノ中納言教具ヲ御頼ミアリテ、是モ勢州ヘ御下向在ケル、此時貞藤ノ子息新九郎長氏モトヨリ今出川殿御還俗ノ以前ヨリ御ナシミ故ニ、彼地ヘ參リ、今出川殿ヘ見參セシカトモ、御旅亭ノ事ナレハ、サノミ何マテアルヘキ、伊豆國ニハ義政公ノ御弟政知公御座マス、其上親族モアリケレハ、關東ヘ下ラント思ヒ立テ、伊勢太神宮ヘ參リテ弓矢ノ冥加ヲ祈念シケレハ、不思議ノ靈夢ヲ蒙リ、一ツノ神符ヲ求メケル、諸願忽チ成就シテ、子孫繁昌疑ヒナシト悦ヒヌ、抑此新九郎ハ少年ノ初メヨリ、山野江海ニ獵漁ヲ好ミ、馬ニ乗テ惡所ヲ越、岩石ヲ落ス事神變ヲ得タルカ如シ、唯造父ガ御ヲ取テ千里ニ疲レサリシモ、是ニハ不過ト覺ヘケル、水練ハ水針カ道ヲ得タレハ、驪龍領下ノ珠ヲモ奪ツヘ

駿河ニ下  
ル  
今川氏ニ  
頼ル

シ、弓ハ養由ガ跡ヲ追シカハ、弦ヲ鳴シテ樹上ノ猿ヲ落シツヘシ、謀巧ニシテ人ヲ昵ヒ、氣健ニシテ心撓マサリシカハ、戰場ニ臨ム毎ニ敵ヲ靡ケ、堅キニ當リ強キヲ破ル事、樊會（應）・周勃カ得サル所ヲ得タリ、サレハ似タルヲ友トスル事ナレハ、其比語ラヒ寄ケル浪人、荒木兵庫頭・山中才四郎・多目權兵衛・荒川又次郎・大道寺太郎・在竹兵衛尉・伊勢新九郎七人何レモ劣ラヌ勇士ニテ、弓馬合戰ノ達者也、太神宮ノ御前ニ參リ、皆々神水ヲ吞テ誓ヒケルハ、譬ヘ如何ナル事アリトモ、此七人不和ノ義不可有、互ニ助ヲ成テ軍功ヲ勵シ、高名ヲ極ムヘシ、侍ノ習ヒナレハ、身ヲ立國ヲシリ、名ヲ揚ル事アラシニハ、殘ル六人何レモ家人トナリ、其一人ヲ主君トシテ、各力ヲ合スヘシ、便佞ノ心アルヘカラス、又主君タラン者モ、殘ル六人ヲ取立ヘシト、應仁三年乙丑二月ニ、各伊勢ヲ出テ東國ニ趣キ、尾張ニ暫ク留リシカ、駿河國ニ下リケル、駿河國ノ守護今川義忠ノ妻室北川殿ト申ハ、新九郎長氏ノ姉ニテ、此腹ノ子ニ龍王丸ハ甥ナレハ、是ニ便リテ居、然ニ文明五年京都ニハ山名宗全・細川勝元兩人正ニ同年ニ病死ス、是ニ依テ洛中暫ク靜ナリ、サレトモ山名方ノ敗軍トモ、己レヲノレカ鬱憤ヲ含テ、國々ヘ下リテ、將軍ノ下知ヲモ不用ケリ、爰ニ遠江ノ住人横地・勝間田等、京ヨリ逃下リテ、逆意ヲカマヘ、近邊ヲ押領ス、遠江國ハ今川ノ分國ナレハ、義忠自ラ軍勢ヲ引率シテ、悉ク退治セ



今川氏ノ  
内争

宗瑞ノ調  
停

興國寺城  
主トナル

ラル、横地・勝間田方々へ敗軍ス、義忠歸陣ノ時、彼惡黨等猶殘リ留リテ、鹽買坂〔鬼〕ニテ義忠ヲ射ル、義忠矢ニ當リテ討死セリ、相隨フ軍勢等悉ク馳著テ、惡黨共ヲ討取ケル、然ルニ今川ノ家老三浦二郎左衛門・朝比奈又太郎・九嶋上總介・同土佐守等亂ヲ起ス、是ニ依テ、家中ニツニ別ル、義忠ノ妻室北川殿并ニ子息龍王丸ヲハ、ヒソカニ山西へ隠シケル、駿河國大ニ亂レ、既ニ合戰ニ及ハントス、サレトモ兩方ニ大將モナク、軍勢東西ニ馳違ヒ、周章フタメク許ニテ、仕出シタルコトモナク、諸軍只アキレテソ見ヘニケル、新九郎長氏、此時兩方和睦アラハ龍王殿ヲ出スヘキト、兩方へ扱ヒケレハ、其後家中和睦シテ、龍王丸并ニ北川殿山西ノ法榮カモトヨリ府中ノ城へ被歸ケル、即チ元服アリテ今川氏親ト號ス、此時七歳ナリシカトモ、尋常十二三歳ニモ越、人ヲ昵ヒ靡ケ、賢ク御座ス故、人々敬ヒ恐レスト云事ナシ、新九郎此度ノ働キ故ニ、國中無爲ニ治リ、家老共悦フ事限リナシ、忠功無比トテ、氏親ヨリ駿河國高國寺ノ城ヲ給リ、富士郡下方ノ庄依田橋・原・柳原・吉原ヲ知行シ、今ニ於テ駿河國吉原ノ池ノ前川端ニ新九郎長氏ヲ神ニ祭リテアルトカヤ、先年ヨリ相語ラヒシ六人ノ者、大道寺・多目・荒川ヲ初メ、皆長氏ノ家臣トナル、○小田原記・相州兵亂記異事ナシ

〔北條盛衰記〕

一 下 早雲移葦山城事

母ハ横井  
時永ノ女

葦山城ニ  
移ル

堀越ノ御所左〔尾羽政親〕兵衛督殿、外山ヲ被誅テ後、新九郎長氏ヲ此城ニ被置ケル、其故ヲ尋ルニ、新九郎母ハ尾州ノ住北條高時ノ末葉横井掃部助カ娘也、伊豆ノ北條ニ横井カ一門有、桑原ノ某トテ、新九郎是又新族也、堀越殿關東下向ノ御時、三島ノ邊ニ住居ス、男子無シテ女子アリ、家ノ絶ンコトヲ歎テ、堀越殿へ申シ、新九郎ヲ聳ニシテ、我家ヲ繼シメントス、新九郎長氏モ高國寺ノ城ヨリ近ケレハ、常ニ時々被參ケル、去程ニ公方ノ仰ニテ、長享二年戊申十月高國寺ノ城ヨリ葦山ノ城へ被移ケル、氣稟慈悲心ニテ、民ヲ憐ミ惠ム事、恰モ赤子ヲ養育ルカ如ク、飢タルヲ救ヒ困ミヲ扶ク、是ニ依テ國中悉ク隨ヒ靡イテ父母ノ如ス、新九郎ハ剃髮シテ早雲菴宗瑞ト號シ、長男ヲ新九郎氏綱ト名ク、次男氏時ハ駿河國竹ノ下ノ住人葛山備中守養子ニシケレハ、駿河國ニ在テ今川氏親ニ仕フ、三男ハ箱根ノ別當ニ契約アリ、後ニハ幻菴ト申ケル、伊豆國ノ一門桑原・田中・横井等皆早雲ニ隨ヒケル、

〔鹽尻〕

十五

北條早雲、永正十六年八月十五日卒す、早雲寺殿天岳宗瑞と號す、早雲は始、廢號なり、

伊勢氏北條家系

正度〔季〕平姓、從四位下、越前守、

秀衡〔季〕右京亮、

盛光〔季〕右京亮、



「盛行左兵衛尉、

盛長

「恒平

恒平三代伊勢守俊繼始號伊勢氏之裔、伊勢備中守貞藤之子伊勢新九郎北條早雲云々、或家系不詳云々、

一説ニ鎮守府將軍平維衡之裔、伊勢守氏貞之孫、駿河守照康次男新九郎長氏ト云々、

一説ニ小松資盛之裔、伊勢肥前守盛經末孫伊勢新九郎盛時、後改北條新九郎長氏ト云々

亦或書には伊勢新九郎は山城國宇治の人と、または大和國在原の産ともいへり、尾張國にも住せしと、母方横井掃部助か縁によりて也、

〔鹽尻〕 二十三

北條新九郎長氏ハ、山城國宇治ノ人、或ハ大和國在原ノ産トモイヘリ、

鎮守府將軍之裔平維平ノ族、伊勢系圖、見大系圖、イニ小松資盛十五世之後トイヘリ、或ハ家系不知トモイヘリ、伊勢伊勢守氏貞ノ孫、伊勢

駿河守照康ノ次男ナリ、照康二子アリ、嫡太郎、始將軍家ニ仕フ、故アツテ浪々トナル、駿州ノ貞次、二男新九郎長氏

國守今川五郎氏親ハ、長氏伯母ノ夫タリ、氏親當氏貞ノ女ヲ娶トス、因テ長享元年、長氏與同志之朋友六

人、所謂荒木兵庫頭・多目權兵衛・山中才四郎・荒川又六郎・在竹兵衛尉、氏親ヲ頼テ倚附ス、氏親其才器ヲ愛ス、或時今川ノ家僕叛

スルアリ、長氏武略ヲ以テ誅之、遂ニ今川氏駿州令高國寺壘領之、於此長氏人數三百人ヲ

扶持シ、民庶ヲ撫テ潜龍ノ時ヲマツ、于此豆州之名家號堀越御所、從三位左兵衛督源政知政知ハ將軍義教公

ノ四男也、嘗爲出家而號香嚴院、寬正二年上杉伊守守教朝、足利成氏退治ノ爲秘計、訴京都、新將帥來向請、於此令香嚴院還俗、從三位ニ敘シ、左兵衛督ニ任シ、關東ニ下シ、大將軍ト仰キ、教朝執事トナリ、關左ノ諸侯渴仰ス、

然レトモ上杉清方・房顯・持朝鎌倉ニ在テ兩管領トナリ、關東ヲ成敗スルニヨリ、鎌倉ニ入ルコトアタハス、豆州

北條ニ居住、堀越御所ト號ス、兩上杉等モ朝觀ノ禮ヲナスコトハアヘテ恭敬ヲ失ハス、或説曰、房顯等、重テ公義

ノ名ヲカリ、京都ニ訴ヘ、下向セシメ、政知ヲ大將軍トシ、上杉管領トシテ、古河公方、長享三年四月五日

成氏ヲ追落ス、コレヨリ兩上杉關左ニ威ヲフルヒ、政知ハ堀越ニ住シテ却テ衰フトイフ、

卒セラル、行年五十七、號勝幢院、後ニ細川政元依推戴上洛、爲征夷將軍、名次ヲ改義澄、亦義政嘗テ父子ノ約アリト云

茶々丸ト號シ、堀越ヲ相續セラル、政知逝スルノ後、家法益衰フ、佞人ノ語ヲ用ヒ、外

山イニ、豊前・秋山藏人トイフ二人ノ忠臣ヲ故ナク誅セラル、上下愕然トシテ亂レ、國

中騷動ス、長氏聞之、忽鷓蚌ノ弊ニ乘リ、延徳元年四月五日、或説ニ政知卒ヲ延徳三年四月五日トシ、此後ヲ明應元年四月五

日ト、人數ヲ促シ、夜中黃瀬河ヲ涉テ、北條ニ亂入ル、而ソノ不意ヲ討、義通・茶々丸周

章、家臣關戸播磨守等纒ニ防戦ストイヘトモ、長氏火攻ヲ以テ、營壘ヲ燒、終ニ潰テ國

人、田子ノ山本太郎衛門、女羅村田市之丞、三津ノ松本、江梨ノ鈴木・佐藤・梅原・雲見・高橋・上村以下ノ輩、悉ク歟ニ降ル、義通逃去ル、茶々丸大森

山ヘ逃入ル、長氏遂テ大森山ニ攻入ル、茶々丸叶ハスシテ、山下ノ禪院ニ入テ自殺ス、

于時十才、義通難ヲノカレテ、箱根山ニ入ル、於此亦親附ノ郎從馳加ハリ、杓義守禦ヲ同シ、明應二年細川政元依推戴上洛セラル、於此長氏蟠

龍來復ノ勢ヲ得、時政草業之嘉例ヲ追テ、平氏中興ノ運ヲ謀リ、伊勢ノ稱號ヲ改メ、北

條氏ヲ稱シ、更號氏茂、豆州葦山ニ居住シ、遂ニ相州小田原主式部少輔實賴ヲ倒シ、岡崎・衣

笠兩城主三浦陸奥守義同法名道守三浦時高カ養子、實ハ大磯城主大森筑前守カ子ナリ、三浦時高ハ大介義明カ末子佐原十郎左衛門尉義連カ裔、三浦五郎盛時カ後也ヲ吞ミ、上杉

ニ敵對シ、至氏綱早雲長氏嫡子、武威益奮ヒ、氏康氏綱ノ子果シテ八州ヲ併合ス、

此傳記、建部氏なる人につね侍りしに、書て送られければ、其筆の儘こゝに書入



永正十六年八月十五日

侍る、

〔早雲寺記録〕

早雲寺  
宗瑞春閣  
寺觀音堂  
ヲ再興ス  
氏綱宗瑞  
ノ遺言ニ  
依リ早雲  
寺ヲ建立  
ス

一 早雲寺之儀、元來ハ春閣寺ト申、眞言宗ノ舊跡ニテ、觀音堂一字殘  
リ候テ在之由、北條早雲公觀音堂御再興、觀音堂ノ舊跡ハ、今ノ方丈ノ後築  
山之上ニ、昭堂ト號シ于今存在ス、  
永正十六己卯年、早雲公御逝去、依御遺言、北條氏綱公當寺御建立、大永元己ノ年、  
山門・佛殿・方丈・經藏・鐘樓・書院・庫裏等不殘成就ス、金湯山早雲寺ト號ス、其  
外寺内諸塔頭寮舍等ハ、連々御代々御建立、

開山宗清

一 當寺開山(宗清)以天和尙ハ、京都ノ人ニテ、十五歳ノ時、京都泉涌寺ニテ剃髮仕候、十七歳

之時ハ建仁寺ニ入テ、一切經ヲ致一覽、其后大德寺東海和尙弟子ニ罷成候、永正十六  
己卯年ノ春、大德寺ニテ出世、勅使ヲ以綸旨被下置、紫衣頂戴仕候、

宗瑞宗清  
ニ參禪ス

早雲公御在京之節、以天和尙ニ就テ參禪問法、早雲公東國へ御下向之節、以天和尙ヨ  
リ送行之詩ニ、

欲遂功名出帝畿、預知塞外振全威、君他日復海東地、分我一簑煙雨磯、

其後早雲公、豆州・相州御治國、豆州葦山へ御隱居之節、以天和尙ヲ京都方御請待

詩  
向ヲ送ル  
瑞東國ノ  
宗清下

歎、豆州香山寺ニ暫ク居住、其后早雲公御逝去、御遺言歎、氏綱公當寺御建立、以天

氏綱宗清  
ヲ早雲寺  
開山ト爲  
ス

和尙ヲ開山ト被成サ、○中略

右當山之舊記、天正亂後紛失、委細雖難知、古老傳來之趣記之、

金湯山早雲寺住山

元祿十四年辛巳仲冬

柏州記之、

〔寶山外志〕

金湯

北條氏長、平氏鎮守將軍貞盛十四世之孫也、據相州小田原城、而領  
略關東八州、初出家爲以天清和尙之弟子、以故某年建金湯山早雲寺于本州、迎清和尙爲  
開山第一世、其子氏綱、其孫氏康、曾孫氏政、玄孫氏直、相次爲早雲寺之大檀也、而寺  
之繁榮、甲于東方、氏長神主表曰早雲寺殿天岳宗瑞大居士、○龍寶山大、  
德寺誌同ジ、

〔新編相模國風土記稿〕

二十七 村里部  
足柄下郡六 早川庄

早雲寺

金湯山ト號ス、

臨濟宗、紫野大、  
德寺末、

早雲寺

本尊釋迦、長一尺三寸、  
運慶作、兩脇文殊・普賢、長九寸五、  
分、同作、當寺ハ北條左京大夫氏綱、先考早雲庵宗  
瑞ノ遺言ニ任セ、建立スル所ニテ、大永元日落成ス、故ニ今早雲ヲ以テ開基ト稱ス、小田  
原記

曰、永正十六年八月十五日、早雲庵宗瑞、伊豆國葦山ノ城ニテ逝去シ給フ、即當國修禪寺ニテ一片ノ烟ニナシ申ケ  
ル、遺言ニ任セ、洛陽紫野ヨリ大德寺派ノ長老ヲ呼下シ、小田原ノ湯本ニ、御圓丘ヲ築キ、山號ヲバ金湯山ト云ベ  
シトナリ、別稱ハ早雲寺殿天岳宗瑞大禪門ト號ス云々、去程ニ、早雲公ノ遺言ニ任セ、相州湯本眞覺ニ、一寺ヲ建  
立アリテ、山號金湯山、寺號ハ早雲寺ト號ス、佛殿法堂山門衆寮以下、大德寺ヲ寫シ、則普請成就シケレバ、紫野  
ヘ北派ノ以天和尙ヲ請下シ、住寺ニ居申ケル云々、按スルニ當時建立以前、眞覺寺ト云古刹アリシ  
ヲ、氏綱再興シテ、早雲寺ト名付シナド、寺傳ニ云リ、故ニ小田原記湯本眞覺ニ云々ト記セシナリ、則紫野ノ  
宗清以天和尙ヲ請テ、開山第一世トナス、

墳墓

北條氏墳 本堂ノ乾丘上ニアリ、五基相並リ、碑背ニ寛文十二年八月十五日、從五位下  
北條伊勢守平朝臣氏治再建ノ由ヲ彫ル、按ズルニ、氏綱當所ニ葬リシ事ハ、小田原記ニ  
モ見ユ、曰、天文十年夏ノ頃、氏綱不豫ノコトアリ、定業ヤ來リケン、次第ニ重リ給ヒシカバ、終ニ同七月十九  
日五十五歳ニテ空シク成賜ヒケル、一門ノ歎申計ナシ、則湯本早雲寺ニテ一返ノ烟ニナシ奉ル、別稱ハ

永正十六年八月十五日



永正十六年八月十五日

春松院殿快翁活公居士ト名付ヌ、其餘ハ實ノ葬地ナルヤ否、慥ナル所見ナシ、○下

三六四

玉繩城址

〔新編相模國風土記稿〕

百四 村里部 鎌倉郡三十六西見庄

玉繩城蹟 村ノ中程山上ニアリ、小名城宿ヨリ、凡一町許ヲ登リテ、大手口ニ至ル、大手ハ西ニ向ヘリ、此郭ヲ御厩曲輪ト呼ヘリ

○下 潤凡千 郭内中程ヨリ、北ヘヨリテハ、一段高シ、最北ニ一口アリ、裏口ト唱フ、惣テ空塹ヲ廻ラシ、土居ノ形尙存ス、本丸御厩

ノ二郭ヲ合セ、東西凡一町、南北二町許ニ及ヘリ、又厩曲輪西南ノ隅ニ、空塹ヲ隔テ、一小郭アリ、圓光寺曲輪ト云フ、本丸東南ノ隅ニ、空塹ヲ隔テ、太鼓櫓、東北ノ隅ニ諏

訪檀 岡本村諏訪社 其北ニ續キテ、蹴鞠場 等ノ名アリ、是等皆當時郭外ノ内ナルヘシ、城蹟今ハ少許ノ芝地アリ、其餘ハ皆林トナレリ、永正九年十月、北條新九郎入道早雲ノ

築ル所ナリ、寛永北條家譜曰、北條新九郎長氏、永正九年十月、相州玉繩城ヲ築ク、按スルニ、今年八月北條

ハ、道寸遂ニ同郡新井城ニ退去セリ、ヨリテ早雲、國中ヲ併吞セシカハ、當城ヲ築シナルヘシ、○下

〔駿河志料〕 十五 益頭郡二 城山 嶺ニ大日堂、中段ニ稻荷ノ小祠 當城ハ伊勢新九郎長氏始メ

居住セシ所ナリ、後ニ興國寺城ニ移ル、○下

〔諸國廢城考〕 十一 興國寺城 文明中、今川氏親、五郎義忠子、伊勢新九郎長氏ヲ封メ、

此城ニ居ラシメ、富士郡下方ノ庄ヲ賜フ、○下

伊豆 菫山城 北條某此城ニ居ル、北條卒スルニ及テ子ナカリシカハ、

彼一門桑原平内左衛門、田中内膳、堀越殿 名氏滿、將軍義政弟、初名政智、稱左馬頭、後更左兵衛督、按

氏、屢與上杉房顯戰、成氏師敗奔于下總、居古河城、於是上 昌山記、富籠記、九代後記、小田原記等、享德中、鎌倉管領成

杉奉將軍義政弟氏滿爲關東管領、居伊豆北條、是爲堀越殿云、ヘ申メ、伊勢新九郎長氏 駿河興國寺城主、按

後更ハ、北條カ外戚ノ甥ナレハ、コレヲ北條ノ遺跡ニト望ミケル間、氏滿ノ下知トシテ、

長享二年十月此城ニ移リ、北條ノ跡ヲ繼ク、サレハ伊勢ヲ改メテ北條氏トソ成ケル、○下

法印大僧都印融、武藏觀護寺ニ寂ス、

〔五輪塔〕 ○武藏觀 護寺所在

永正十六 卯巳 季 印融法印

八月十五日

〔高野春秋〕 十一 秋八月十五夜、印融閣梨、入寂于武州鳥山觀護寺、又三會寺、融師者、

登山、事教業成、入職無量光院、開講不撓、義論入玄、筆記不可勝計、晚年遊說關東、與談林創論場、平生不措書籍、

恒居鳥山三會寺、時々隣里佗山母之講論、乘小牛、而架其牛角於卷帙、行々熟讀焉、辭世歌曰、生ル、モ孔字ヨリ

來レハ死トテモ本不 生ニ歸リコソスレ

永正十六年八月十五日

三六五

駿河石脇

同國興國

寺城

伊豆菫山

城

觀護寺ノ

塔

武藏久保

高野山無

量光院ニ

住ス

晩年武藏

三會寺ニ

居ル

居

武藏久保

人

無

高野山

量光院

住ス

晩年武藏

三會寺

居ル

居

武藏久保

人

無

高野山

量光院

住ス

晩年武藏

三會寺

居ル

居

武藏久保

人

無

高野山

量光院

住ス

晩年武藏

三會寺

居ル

居

武藏久保

人

無

高野山

量光院

住ス

晩年武藏

三會寺

居ル

居

武藏久保

人

無

高野山

量光院

住ス

晩年武藏

三會寺

居ル

居

武藏久保

人

無

高野山

量光院

住ス

晩年武藏

三會寺

居ル



永正十六年八月十五日

三六六

〔本朝高僧傳〕

淨慧二之十五

紀州高野山沙門印融傳

釋印融、武州久保縣人、生氣含英、特具志節、群籍經目、自然憶持、鄉邑無足爲師者、弱冠杖策、遍學南北、駐高野山、練淬業成、主無量光院、品藻宗教、筆削著志、嘗憂關左密法之衰、晚年東行、居武州鳥山三會寺、性好讀書、或赴外請、必駕小牛、鞍著文卓、行誦且吟、東關緇白、崇德歸風、永正十六年八月中旬夜半取滅、壽八十五、關東八州、有古義談林六十餘院、寫融小肖、歲時饗祭、平生撰述、有柚保隱遁鈔二十卷・釋論指南鈔十卷・大日經指南鈔九卷・釋論愚案鈔七卷・古筆拾遺鈔・十住心論廣名目各六卷・大日經愚案鈔・金胎曼荼羅鈔各三卷・大日經奧之疏詮要鈔・諸真言句義釋論名目各二卷等、凡數十百卷、學者爲珍行于世、

〔野峯名德傳〕

下

印融、武州久保人也、神鋒潤利、品格卓犖、教文經耳閱目咸通

誦、邦郡无足爲師範者、於是裂裳裹足、振屣而遠昇此山、討明師遊講門、精究兀々、盛烈夙蓋一時、入住無量光院、肆講筵、玄津弘派、日夕勉勗、究年不撓、事教之間、理致微茫之所、卽揮毫辯折、淵曲洞明、老後患關左密法之不振而東遊、止住武陽鳥山三會寺闡化、老而尙不倦、或赴人之請益、則必乘小牛、鞍上立書架、口不絕誦法文、東域大嚮風、永正十六年八月十五日夜半滅、年八十五、滅後至關左八州古義談林六十餘區、寫公之遺真以拜供、生平之編述、柚保隱遁・古筆拾遺・印信廿四帖等若干部、數十百卷、學

讀書ヲ好  
關八州古  
義談林印  
融ノ肖像  
ヲ饗祭ス

壽八十四  
歳トノ説

法系

者爲龜鑑行于世、

贊曰、工欲善其事者、必先利其器、融師本以其器利成其事者、豈不善乎、若其高舉遠討者、可謂能擇者也、

〔年代記配合抄〕

永正十六年己卯、印融法印入滅、八月十五日、八十四、

〔三寶院傳法血脈〕

醍醐寺 三寶院

第卅三代賢繼法印德行并附法弟子 二人、

鎮繼本名鎮榮、鳥山三會寺住持

印融于時アサリ、大僧都法印、年二十八、

長祿四年庚辰十月四日、斗（宿）日（唯）於武州小机保鳥山鄉三會寺受之、色衆十六口、

興照寺（唯） 王禪寺（唯） 滿願寺（唯）  
圓鏡法印、誦（唯）、鎮有法印、唄（唯）、祐尊法印、護摩、  
金藏院（唯） 賢榮法印、嘆（唯）、鎮繼僧都、教（唯）、繼順僧都、散（唯）、

第卅四代印融法印德行并附法弟子

予自幼少之古、至老長之今、染心於事教之二相、懸思於楚漢之兩文、染筆書寫之業无懈、稽古鑽仰之志不倦、雖然天性愚鈍之故、未達本懷賢利之伍、奉值賢繼法印、長祿三年己卯十二月十五日、受許可之密印、同四年庚辰、傳傳法之職位、翌年諸尊法傳受

永正十六年八月十五日

三六七

賢繼ヨリ  
許可ノ密  
印ヲ受ク



永正十六年八月十五日

三六八

之、寛正二年辛巳六月一日、<sup>鬼(宿)</sup>傳祕密灌頂、<sup>水(龍)</sup>第二某年、白表紙妙抄・玄祕抄・厚双紙・  
奥疏等傳受之、同四年癸未二月十六日、<sup>危(宿)</sup>受祕密灌頂、<sup>土(龍)</sup>第三同五年甲申十二月十五  
日、<sup>星(宿)</sup>傳瑜祇灌頂、此時當流不共嫡々相承大事等受之、誠以師恩慈海、經多劫難報  
難酬者也、

附法弟子

- 一 祐榮 于時律師、太田東福寺、
- 一 宥深 入寺高野山二階堂、
- 一 融惠 于時律師、大僧都法印、金澤光德寺住持、
- 一 融辨 于時律師、僧都、法印、同寺住持、
- 一 宣嚴
- 一 有譽 慈仙房、
- 一 融契 智德房、
- 一 圓印 入寺高野山大乘院、
- 一 長淳 僧都、上州新田庄圓福寺、
- 一 範譽 通照房、
- 一 朝教 宗尊房、以後後年歲、重灌頂嫡々大事授之、

三寶院流ノ傳法ヲ承ク四帖私口決目録

- 一 寛海 律師、
- 一 良尊 僧都、
- 一 慶賢 僧都、達藏坊、
- 一 聖圓 僧都、實相坊、
- 一 鎮清 僧都、東光坊、
- 一 有清 僧都、密乘坊、
- 一 有傳 慶尊坊、
- 一 覺日 本名長圓、石川寶生寺、
- 一 眞賢 アサリ、
- 一 覺範 アサリ、
- 一 覺融 アサリ、
- 一 白範 僧都、

〔私口決鈔目録〕

○信濃佛法寺所藏

三寶院許可血脉一紙、私一帖、

永正十六年八月十五日

三六九



永正十六年八月十五日

三七〇

法汀 三紙、私三帖、印明一、紹文一、血脉一、  
 蘇悉地汀一紙、私一帖、  
 第二重 一紙、私一帖、  
 第三重 一紙、私一帖、  
 瑜祇印信 卅七尊一紙、私一帖、  
 瑜祇內作業汀 十五尊一紙、私一帖、  
 瑜祇灌頂 一印一明一紙、私一帖、  
 瑜祇三重 一紙、私一帖、  
 瑜祇切文事 一紙、私一帖、  
 口決大事「私」一帖、  
 阿闍梨位大事 一紙、私一帖、  
 靈水丁 一紙、私一帖、  
 座主汀丁 一紙、私一帖、  
 惣許可 一紙、私一帖、  
 理趣汀丁 四紙、私一帖、

菩提心論汀丁 一紙、私一帖、  
 清瀧御事 一紙、私一帖、  
 當流大事傳授次第事、「私」一帖、  
 當流重書 一紙、私一帖、  
 寺号大事 付遍智院、私一帖、  
 寺号大事 付三寶院、一帖、  
 已上廿四帖

累年雖發記如斯「之」趣、且恐佛意之照覽、且思教在之過失、不記之、雖然爲令全當流之  
 大事、慎撰重書之秘傳書記之、不受師命、自由仁披見之輩、可蒙兩部諸尊・八大祖師・  
 清瀧權現・諸大明神之冥罰者也、

金剛佛子印

三寶院許可血脈

△口決

○信濃佛法寺所藏

文明十<sup>(庚戌)</sup>七廿五記之、

金剛佛子印融

同十二月十三日賜御本書之、

弟子融辨

傳法灌頂印明

〔法汀印明 三口決三帖之內第一〕

○信濃佛法寺所藏

永正十六年八月十五日

三七一



永正十六年八月十五日

三七二

于<sup>〔吳書〕</sup>叱文明十年八月一日記之、<sup>〔安〕</sup>金剛佛子印融、此草<sup>〔ナルイ〕</sup>安分<sup>〔定テイ〕</sup>共故<sup>〔共ニテラ〕</sup>是言便次第、文字、筆跡、可有謬失歟、恐々、穴賢々々、

〔佉灌頂紹文 山口決三帖之内第二〕<sup>○信濃佛法寺所藏</sup>

傳法灌頂阿闍梨職位事

昔大日如來、開大悲胎藏・金剛秘密兩部界會、授金剛薩埵、數百歲之後、授<sup>〔龍〕</sup>猛龍井、如是金剛秘密大悲胎藏之道、迄于吾祖師根本<sup>〔空海〕</sup>弘法大師、既八葉焉、今至予身<sup>〔會〕</sup>卅三代、傳受次第、師資血脈、相承明鏡也、小僧<sup>〔年々〕</sup>數奇之間、盡求法<sup>〔之〕</sup>誠、幸隨先師<sup>〔祖イ〕</sup>義繼法印、蒙兩部灌頂印可、爰印融、深信三密奧旨、久學兩部大法、今機緣相催、以投花軌則、示自性本分、所授傳法汀之密印也、能洗五塵之染、可期八葉之蓮、是則酬佛恩答師德、吾願如此、不可餘念耳、

長祿四年<sup>歲次</sup>十月四日、斗<sup>〔管〕</sup>辰<sup>〔日〕</sup>、

大阿闍梨法印賢繼大和尚位

私云、是ハ等葉、紹、文也、是則付一印二明、今當流具支汀式處文也、全不付二印二明也、然傍流或許可時出之、或必就二印一明云、大非也、延命院式、石山<sup>〔深野〕</sup>内供等、又等葉云云、即此事也、石山淳祐延命院元杲所授二印二明、紹、文ハ、不等葉也、先如

記、惣淺略式、二印二明、不等葉一具也、深秘式一印二明、等葉紹文一具也、而於當流淺畧式削之、二印二明、不等葉文授許可<sup>〔授イ〕</sup>可授<sup>〔授イ〕</sup>深<sup>〔授イ〕</sup>二式一印二明、今等葉文、可授傳法、然而秘<sup>〔授イ〕</sup>二<sup>〔授イ〕</sup>印<sup>〔授イ〕</sup>二<sup>〔授イ〕</sup>明<sup>〔授イ〕</sup>以前許可二印二明、取替示之也、是且機根ヲタメラウテ作法ヲハ雖授、深秘印明不授也、

〔長祿四年九月イニナシ〕  
同廿三日記之、

金剛佛子印<sup>〔授イ〕</sup>

〔等葉、紹、文、義範、御制作也、勝覺授與シ王<sup>〔後〕</sup>後記、上ノ末ニアリ〕

〔佉汀血脈 山口決〕<sup>○信濃佛法寺所藏</sup>

兩部灌頂血脈

大日	金薩	龍猛	龍智
金剛智	不空	惠果	弘法
真雅	源仁	聖寶	觀賢
淳祐	元杲	仁海	成尊
義範	勝覺	定海	元海
實運	勝賢	成賢	道教
親快	實勝	賴瑜	賴緣

永正十六年八月十五日

三七三

傳法灌頂血脈



永正十六年八月十五日

三七四

實眞 等海 義印 義繼  
賢繼 印融

私云、此血脈列名、是又等葉紹文一具「付一印二明」也、全不就二印二明也、而傍流不知安内方〔案イ〕、必ス二印二明ノ血脈得ル心也、若二印二明〔添イ〕ソウ處、不等葉血脈ナラハ者、可〔此イ〕如是次キノ、

大日 金薩 龍猛 龍智 金智 不空 惠果  
台 金剛手 掬多 善無畏 玄超 惠果 弘法

眞雅 源仁 聖寶 觀賢 淳祐 元果 仁海 成尊 義範 勝覺  
二印二明 觀・寬空ト相傳モ在之、

定海 元海 實運 勝賢 成賢 道教 親快 實勝 賴瑜 賴縁  
實眞 等海 義印 義繼 賢繼 印融 覺融 快音 慶雄  
〔實融以下三世、實生寺本ニナシ、

於當流、不等葉二印二明血脈如此也、爾如是書不出也、又聖寶御方・益信御方、共二印二明、代數同三代ッ、ナリ、仍付何金剛界卅四代、台藏界卅三代也、不等葉代數異事於月氏辰旦事也、

本云 同三日記之、 金剛佛子印融  
〔長祿四年十月〕

蘇悉地灌頂印明

〔蘇悉地灌頂印明 私口決〕 ○信濃佛 法寺所藏

金剛佛子印融

第二重

〔第一重 私口決〕 ○信濃佛 法寺所藏

金剛佛子印

信三十七尊

〔同四日記之、〕 ○信濃佛 法寺所藏  
〔長祿四年十月〕

金剛佛子印

業灌頂

〔同十三日記之、〕 ○信濃佛 法寺所藏  
〔長祿四年九月〕

金剛佛子印

瑜祇灌頂

〔同十二日記之、〕 ○信濃佛 法寺所藏  
〔長祿四年九月〕

金剛佛子印

瑜祇三重

〔同十五日記之、〕 ○信濃佛 法寺所藏  
〔長祿四年九月〕

金剛佛子印

口決大事

〔同十六日記之、〕 ○信濃佛 法寺所藏  
〔長祿四年九月〕

金剛佛子印

永正十六年八月十五日

三七五



永正十六年八月十五日

右口決、三寶院上下、云重書、中ヨリ撰書之也、

金剛佛子印

三七六

阿闍梨位

〔阿闍梨位大事 私口決〕 ○信濃佛  
法寺所藏

金剛佛子印

座主灌頂

〔座主灌頂 私口決〕 ○信濃佛  
法寺所藏

金剛佛子印

惣許可

〔惣許可 私口決〕 ○信濃佛  
法寺所藏

金剛佛子印

理趣灌頂

〔理趣灌頂 四通私口決〕 ○信濃佛  
法寺所藏

金剛佛子印

清瀧御事

〔菩提心論灌頂 私口決〕 ○信濃佛  
法寺所藏

金剛佛子印

傳授次第

〔當流大事傳授次第 私口決〕 ○信濃佛  
法寺所藏

金剛佛子印

當流重書

〔當流重書事 私口決〕 ○信濃佛  
法寺所藏

寺號大事

〔寺號大事 付遍智院私口決〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔寺号大事 付三寶流私口決〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

印融抄後

〔印融抄 後記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

永正十六年八月十五日

于時明應八年正月候、依高野山二階堂長惠僧都之所望、馳愚筆、  
印融法印六十五才

三七七



永正十六年八月十五日

〔其外先記載之故拋筆也、

明應八年己未正月廿五日記之了、

三寶院末資印融〔六十五〕

〔去〕文明十年之比、高野山大乘院圓印僧都之望依、任祖師之重書、廿四帖記之、今年

明應八年之候、更依同山二階堂長惠僧都之懇望、廻愚慮之輕才、三帖記之也、

三寶院末資印融六十五才○私口決鈔目錄ヨリ本

祕密第二重第三重

〔祕密第二重〕○武藏寶生寺所藏

二十四帖血脈

〔二十四帖血脈〕○武藏寶生寺所藏

二十四帖血脈

三寶院末資實全

親快—實勝—賴瑜—賴緣—實眞—

鎮海—善海—眞譽—善範—高範—善譽—高譽—宥譽—宥存—宥雄—

義印—義繼—賢繼—印融—覺融—空音—觀海—覺應—頻仁—

宥旻—宥相—禪進—賴辯—辯雅—實全—

私云、此二十四帖血脈如此雖非以範所傳、今私入置也、三寶院末資禪進

亮惠二帖破文  
四撰シテ  
ヲ融相承  
印說ヲ排  
ス

〔廿四帖破〕

○武藏寶生寺所藏

於本寺曾印信ノ口決無之、今案不可然、

印融廿四帖之破文、東寺法井院亮惠僧正作、

切紙已上十八、  
鏡任房  
善譽(花押)

慶長十季八月十三日

此書印融與亮惠僧正直決ヲ不<sub>レ</sub>聞、如何末學ノ分、一師ノ相傳ヲ非<sub>シ</sub>、一師ノ口決是<sub>レ</sub>事難計、

于時寬保第三癸亥年六月廿二日書寫畢、

實全(花押)

〔傳法灌頂紹文〕

○武藏寶生寺所藏

傳法許可灌頂印信

昔大日如來、開大悲胎藏・金剛秘密兩部界會、授金剛薩埵、數百歲之後、授龍猛菩薩、如是金剛秘密之道、迄于吾祖師根本阿闍梨耶弘法大師、既八葉焉、今至愚身第卅四代、大悲胎藏卅三葉、傳受次第、師資血脈、相承明鏡也、小僧數年之間、盡求法之誠、幸隨先師法印、蒙灌頂印可、爰法印覺日、深信三密奧旨、久學兩部大法、今機緣相催、所授許可灌頂密印也、能洗五塵之染、可期八葉之蓮、是則酬佛恩答師德、吾願如此、不可餘念耳、

武藏寶生  
寺覺日ニ  
與ヘタル  
印信

永正十六年八月十五日



永正十六年八月十五日

文明十八年丙午正月十一日 水曜、  
鬼宿、

傳授阿闍梨法印權大僧都印融○本印信ハ印融ノ自筆ニカ、ル、

〔靈灌頂〕○武藏寶生寺所藏

〔靈灌頂〕〔繪真卷〕

靈灌頂

閉金

元氣系

塔印 閉胎

孔孔孔孔

開妙成

孔孔孔孔

元呆大僧都

明觀宮座主

覺源宮大僧正

定賢法務

勝覺僧正

文明十八年丙午正月十一日 水曜、  
鬼宿、奉授覺日了、

傳燈大阿闍梨法印權大僧都印融○本印信ハ印融ノ自筆ニカ、ル、

〔座主相承大事〕○武藏寶生寺所藏

〔繪真卷〕

三寶院唯授附法樣

師資更並座

對面不二方

迎接成圓塔

如妙法華印

三佛同法界

無相無分別

一大虛空輪

孔之孔之

知空盡消躰

獨存第一命

照了心明道

諸色皆發光

爲備廢忘頌之、勝賢

文明十八年丙午正月十一日、奉授覺日了、

傳燈大阿闍梨法印權大僧都印融○本印信ハ印融ノ自筆ニカ、ル、

〔第二重一印一明〕○武藏寶生寺所藏

第三重一印一明

最極秘密法界躰兩部不二冥會印明化他之時開之、自證之時閉之、

法界塔婆印

五大明

孔之孔之

文明十八年丙午正月十一日 水曜、  
鬼宿、奉授覺日了、

傳燈大阿闍梨法印權大僧都印融○本印信ハ印融ノ自筆ニカ、ル、

永正十六年八月十五日



永正十六年八月十五日

三八二

〔作法集口決〕

○高野山寶  
龜院所藏

右口決者、幸心抄・開心抄并古抄等中雖載之、類聚相束而爲令見易如此記處也、此五十四帖之作法之次第、多分遍知院御記、少々憲（深）一等之記、又古本等也、然作目錄集五十四帖事、誰人作云事未勘也、親快所集歟、追而可勘之也、彼作法集、此口決抄相具、恐未代之重寶歟、可秘々々、

文明十年戊戌師走之比記、

三寶院流末資印融

〔傳法灌頂印融記〕

文明十一年己亥正月上旬之比記之、自非正嫡弟子不可見、可秘々々、

金剛佛子印融

〔薄草紙第二重口決〕

○高野山寶  
龜院所藏

文明十一年己亥七月下旬記始之、  
〔內題ノ下ノ宛大〕  
〔一〕薄第二重之口決未曾有處、此印鈔及一見了、佛馱感應之、則刻令書寫者也、

正保二乙酉曆九月吉日

金剛佛子政與〔宋書〕以一本交合了

〔二〕文明十一年八月中旬之比記之、

千佛子印融〔宋書〕校了

〔三〕正保二乙酉曆九月吉日

金剛佛子政與

〔四〕文明十一年八月下旬之比記之、

三寶院末資印融

〔五〕御本云、

文明十一稔己亥九月三日記之了、

抑賴瑜薄草決者、就唯普通之尊法記之、聖憲金薄抄者、雖有第二重之抄物少分也、依之集拾先哲之口決、擇取古抄之筆跡、成十帖之書籍、誠以雖多其憚、只爲開末弟之愚昧也、此記私云字本來之私傍書予之私不尔、又懸點以之爲不同而已、

三寶院流末資印融

〔武藏實生寺所藏〕

末 ○武藏實生寺所藏

長享二年申戌十月十三日、於武劬王禪寺抄之了、付當流四度之次第、賴瑜抄、〔五〕教舜抄、〔一〕、師傳抄〔四〕在之、然者此外別而所記私抄、雖似無用、於彼抄等者、或憲深口決、或意教口傳也、道教大僧都御傳、一向不載之、又彼抄等、有所用有所不用、今爲辨當流所用之筋目所抄之也、後弟可察之、

三寶院末資印融〔五〕四才

〔三教指歸私抄〕

○高野山寶  
龜院所藏

長享二年申戌師走十二日、於武劬王禪寺記始之、

印融

永正十六年八月十五日

三八三



永正十六年八月十五日

西院流抄  
八道私抄

武藏金澤  
光德寺

〔十八道私抄〕西院流 ○武藏寶生寺所藏

長亨三年四月十日、於武劬金澤光德寺記之了、於此抄者、恣載祖師之口決、飽引重書之祕傳、誠有其憚、又有其恐、不可不秘、不可不重、予自非法流相續之人、誰披見之、誰書寫之乎、

印融法印五十

永正十一曆白露下旬之候、於武劬勝治由木、蒙師免許書寫之了、

權律師善朝知聰房

貞享五戊辰六月下旬、寺之砌書寫者也、

校合竟、開嚴七十二

〔曆丁丑十二月十二日〕

□□落書有之、大概書加之、

〔十八道私抄〕西院流 ○武藏寶生寺所藏

〔內題〕十八道私抄 就西院流元一方記之、長亨三己酉四五混始之、

印融

長亨三年四月十日、於武劬金澤光德寺記之、○下略、前書ニ同ジ、

寬永十九年壬午林鐘中旬、書寫之畢、

長賢

〔十八道私抄〕本 ○武藏寶生寺所藏

三寶院流  
十八道私抄

〔三寶院十八道私抄〕

印融

〔以上要心條々抄了〕

印融

天文十七年戊申正月日、求法珪胤房カ良畔之、

永祿八年乙丑五月十五日、求法雄延同筆者、

金剛界私抄

〔金剛界私抄〕武藏寶生寺所藏

右於此抄、依法皇御次第、觀念之文具載之、於今私次第者、讓彼御次第略之、而三密相應加持故、早得大悉地高祖御判也、若闕意密觀、有闕支分之失、必可用之、然今明分、時乎偏依此私次第、傳受修行故、暗此道理、依之以本次第傳受、以私次第修行、○以下

長亨三己酉四月十九日記之了

印融

武藏圓光坊

永正十一年菊月八日、於武劬勝治保由木圓光坊閑窓書寫之訖、

權律師善朝智聰房

〔金剛界私抄〕西院流 ○武藏寶生寺所藏

右於此抄、依法皇御次第、觀念之文具載之、於今私次第者、讓彼御次第略之、而三密相應加持故、早得大悉地高祖御高判也、若闕意密觀、有闕支分之失、必可用之、然今時分、偏依此私次第、傳授修行故、暗此道理、依之以本次第傳受、以私次第修行、セヨト定ル處也、

永正十六年八月十五日

三八五

三八四



永正十六年八月十五日

三八六

胎藏界私抄

長亨三年<sup>〔季〕</sup>酉四月十九日記之了、  
寬永十九年<sup>〔季〕</sup>午林鐘中旬書寫之畢、

〔胎藏界私抄 西院流〕 ○武藏寶生寺所藏

印融  
長賢<sup>〔季〕</sup>

右一部四冊者、悉任古德之秘傳、全非今案之愚意也、尤可秘藏、敢勿散佚而已、

長亨三年<sup>〔季〕</sup>酉五月六日、於武刃金澤光德寺記之了、

金剛佛子印融

寬永拾九年<sup>〔季〕</sup>午四月中旬書寫之畢、

長賢之

〔胎藏 私記〕 ○武藏寶生寺所藏

〔胎藏私抄 西院流〕

長亨三年<sup>〔季〕</sup>酉四月廿九日、於金澤光德寺記之了、

金剛佛子印融

〔胎藏私抄 西院流〕 ○武藏寶生寺所藏

〔胎藏私抄 西院流 長亨三四廿九記始之、〕

〔胎藏私抄 西院流 長亨三四廿九記始之、〕

長亨三年<sup>〔季〕</sup>酉五月六日、於武刃金澤光德寺記之了、

金剛佛子印融

慶安四年 菊月三日、同國多々久定光寺居住時分、右之一部二冊、石河寶生寺長弁

秀弁深音房

宗義秘傳私鈔

〔宗義秘傳私鈔〕 ○武藏寶生寺所藏

長亨三六一鬼記之

沙門印融

〔明曆貳年丙申九月吉旦

中村五郎右衛門開版

宗義譬說拾集鈔

〔宗義譬說拾集鈔〕 ○武藏寶生寺所藏

永正三年<sup>〔季〕</sup>丙七月下旬之頃、爲高野住山仙順房之所用、自敎相重書之、<sup>〔印融七十二年、</sup>

如水堂賢盛

惟正德第四龍宿甲午林鐘上澣、南山遊學之砌、溪上於寶塔階堂、<sup>〔二載之〕</sup>謹書之、近者爲學解一助、遠者爲後葉醬覆而已、乃至法界平等法施、

〔表白〕

延德三年辛亥四月一日、於武州足立郡河口錫杖寺、依求法弟子之所望抄之、

沙門印融

本云、右八帖表白、三寶院流諸尊法、或拾古賢之筆跡、或廻今愚之短才、爲求法弟子

永正十六年八月十五日

三八七

表白 武藏河口錫杖寺



永正十六年八月十五日

所記也、

兩部曼茶羅私抄

〔兩部曼茶羅私抄〕

胎

延德三年〔與書〕辛亥仲冬之候、爲令拂弟子之迷霧、朗自心之覺月抄之了、

金剛佛子印融五十歲

正本雖爲一卷、由大帖、分成兩卷、雖似自由、任遍口帖卷之例者也、

已上兩行檢校法印覺融加筆了、

釋論名目

〔釋論名目〕

下

延德四年初夏之比、依弟子之所望抄之、

沙門印融

十住心論鈔

〔十住心論鈔〕

○高野山寶龜院所藏

〔十住心論私記〕

〔與書〕本云、明應元〔內題〕壬子十一月八日

權少僧都政祝六十七

印融五十八

〔與書〕本云、明應元〔四下與書〕壬子十二月一日

〔與書〕本云、權少僧都政祝六十七

明應元〔四上與書〕壬子十二月十二日書寫之、

印融

〔四下與書〕本云、明應元〔五與書〕壬子十二月二日寫、是則紹隆密教、利益有情之志願也、

印融五十八

〔五與書〕本云、權少僧都政祝

明應元〔六上與書〕壬子十二月十二日

印融五十八

〔六上與書〕本云、權少僧都政祝六十七

明應元〔六下與書〕壬子十二月二日寫、是則紹隆密教、利益有情之志願也、

印融五十八

〔六下與書〕本云、明應二年〔七與書〕丑正月廿五日書寫之、

印融一交畢、

〔七與書〕本云、明應元〔八與書〕壬子十二月二日寫、是則紹隆密教、利益有情之志願也、

權少僧都政祝集之、七十

〔八與書〕本云、明應元〔九與書〕壬子十二月二日寫、是則紹隆密教、利益有情之志願也、

印融五十八

〔九與書〕本云、明應元〔十與書〕壬子十二月二日寫、是則紹隆密教、利益有情之志願也、

印融

〔十與書〕本云、明應元〔十一與書〕壬子十二月二日寫、是則紹隆密教、利益有情之志願也、

權少僧都政祝集之、六十七

永正十六年八月十五日



永正十六年八月十五日

印融五十八

三九〇

〔上奥書〕已上十住心論私記一部十二卷、如形草案畢、依宗々肝文等雖記之、少智之至、亦愚老之故、定有誤失歟、

永享六年甲寅七月十九日、尾州大須真福寺寶生院調卷而已、

權僧都政祝六十七

始自延德四年十一月六日、至同五年二月廿七日、十二冊一校合畢、

法印印融五十九

願以書寫功德力、哀愍攝受三寶海、八大祖師增法樂、先師（一）聖成正覺、慈父悲母成佛道、法界衆生同利益、

〔刊記〕明曆元乙未初冬吉祥日

中野氏小左衛門開板

古筆拾集抄

〔古筆拾集抄〕

〔二奥書〕文龜元年八月二十一日抄了、

金剛佛子印融

〔五奥書〕奧云、本云、此二帖殊可秘藏也、一條無非自宗實談故、皆引賴實法印抄釋引之也、眞言

三教指歸  
文筆解知  
鈔

宗名目・體大東聞記・卽身義東聞記、此三部共以賴實抄也而已、

文龜二年壬戌九月十四日記之了、

印融六十八歲云々、

〔三教指歸文筆解知鈔〕

○上野圖書館所藏

〔上奥書〕文龜四年甲子閏三月十日、上卷分記之了、

印融七十

〔中奥書〕文龜四年甲子閏三月十三日、中卷之分記之了、

印融七十

〔下奥書〕文龜四年甲子閏三月下旬之候、辨作文之文質、別雜筆之筆跡抄之畢、是則奉顯高祖之御素意、爲拂弟子之迷霧心也、

印融滿七十歲

〔大疏詮要抄〕

〔印融記之〕

〔奥書〕御本云、

金剛佛子印融七十一

永正二年極月廿九日

〔刊記〕寛文八年 前川茂右衛門尉

〔秘鍵文筆鈔〕

○高野山寶龜院所藏

永正三年丙寅正月月中旬之頃、爲諸弟子等之所學記之也、抑安大師高判、於序釋者、用雜筆

永正十六年八月十五日

三九一



永正十六年八月十五日

三九二

之體、於頌文者、要作文之法、而近代之學者、不知此事、不可悲、不可不歎、既破戒無  
懺之禪徒、肉食具毒之儒者、皆以褒美之信仰之、自宗學徒不知之、諺云、燈臺本闇、此  
謂也、誠以不知大師之素意、不得高〔離カ〕之志趣、何以不真言之知人乎而已、

印融七十二歲

灌頂用意  
三西不同  
抄

〔灌頂用意三西不同鈔〕

印融記 ○武藏寶  
生寺所藏

三西不同鈔、印融記之、三者三寶院、西者西院流也、

永正六年〔與唐〕己閏七月上旬之候記之了、

印融七十五歲

先師印融法印、窮於野澤幽致、仁和・西西之若與、被住〔住〕置私鈔、雖爲秘藏、求法之懇  
志、見不淺免許畢、

天文廿三年六月廿一日

前宮法印覺融在判

良範僧都御房〔七〕參レト有之、

如此、御本、良範僧都之懷兩膝〔三〕、致頻懇望、御恩借令寫者也、雖惡筆力〔一〕、一文、無文之  
儀〔二〕同ト存出、染禿毫者也、

寬政十一年南呂下旬書之、

沙門隆道

于時萬延元〔庚申閏三月吉日〕武州金澤知足山之資阿呼〔一〕御房以御本書寫畢、

武州久良岐郡上大岡邑蓮上院一代

アヲ玉道

十住心論  
廣名目

〔十住心廣名目〕

〔一〕〔與唐〕永正七年〔庚午〕二月、始自十六日、至廿五日、當卷記之畢、是則爲高野住山之仙順房要書也、

印融七十  
六歲

寶龜院老苾芻朝印、以彼于正本令校合之畢、

〔二〕〔與唐〕永正七年〔庚午〕三月三日、當卷抄畢、

印融七十  
六歲

〔三〕〔與唐〕永正七年〔庚午〕三月十四日、當卷記畢、

印融七十  
六歲

〔四〕〔與唐〕永正七年〔庚午〕三月廿七日、當卷記畢、是則爲高野住山仙順房之要書也、

印融七十  
六歲

〔五〕〔與唐〕永正七年〔庚午〕四月八日、此卷記畢、

印融七十  
六歲

〔六〕〔與唐〕始自永正七年〔庚午〕二月十六日、至于同四月十六日、六旬之間、一部六冊令記之畢、是則依

印融七十  
六歲

高野住山仙順房之所望也、

寶龜院老苾芻朝印、以彼于正本令校合之畢、

〔刊記〕〔與唐〕皆寬永八〔辛未〕曆大蔭上旬令開板之、洛下上柳町

員外沙彌嘉休

〔十住心廣名目〕

六

永正十六年八月十五日

三九三



永正十六年八月十五日

三九四

〔註〕此名目六册者、印融曩哲之所鈔焉、寔伊住心之紀綱、學爨之礎礎也、猗歟、轉寫幾陳、刊梓紛錯、造若記籤替鄰、祖傳濫系、虛趨千里、駟馬難逐、胡爲古閱者弗糾乎、或悽之、扣余之門、荐所謂這校與冠書也、固辭不許、仍區區叨染禿毛於松煙乎哉、若夫入容傑之鴻覽、更有失者、請勿蘄矣、〔三年〕皆寬文昭陽單闕素商日、沙門秀翁書、

〔刊題〕銅駝坊書肆平樂寺村上勘兵衛刊行、

〔杣保隱遁鈔〕

杣保隱遁鈔  
水河鄉明王堂

〔一與書〕永正十一年甲戌六月中旬之候、於武州杣保水河鄉由木村明王堂、以紙衣之袖、拭於老眼、以筆軸之端、握于老手、且爲今時之弟子、且爲後世之末學記之了、

印融滿八十歲

同十三年丙子正月二十日、爲松壽丸之學文清書之也、

印融八十二歲

〔二與書〕永正十一年甲戌七月上旬之候、且爲當時弟子之稽古、且爲後世末資之所學也、

印融滿八十歲

同十三年丙子二月上旬之候、爲松壽丸之所學書寫之也、

印融八十二歲

〔三與書〕永正十一年甲戌六月二十五日記之畢、

眼者膜翳而筆端不著紙面、心者矇昧而思慮不染机上、雖然、爲弟子等之所用記之所也、

印融滿八十歲

同十三年丙子二月中旬之候、爲松壽丸之所學書寫之也、

印融八十二歲

〔四與書〕永正十一年甲戌七月四日、此帖記畢、

印融滿八十歲

同十三年丙子二月中旬之候、爲松壽丸之所學書之畢、

印融八十二歲

〔八與書〕永正十一年甲戌七月二十八日、此帖記畢、

印融滿八十歲

〔九與書〕永正十一年甲戌十一月上旬之候、〔下〕關方

印融八十二歲

同十三年丙子三月下旬之候、爲松壽丸之學文書寫畢、

印融滿八十歲

〔十與書〕永正十一年甲戌十一月二十四日、已上五箇條於武州足立郡於浦羽延命寺記之了、

印融八十二歲

同十三年丙子四月上旬之候、爲松壽丸之學文書之了、

印融八十歲

〔十一與書〕已上五箇條、永正十一年甲戌十二月中旬之候、於武州足立郡浦和延命寺記之了、

印融八十二歲

浦和延命寺

永正十六年八月十五日

三九五



永正十六年八月十五日

三九六

〔已上五箇條、永正十一年甲戌十二月二十三日、於武州足立郡浦和延命寺記之了、

印融滿八十歲

同十三年丙子五月上旬之候、爲松壽丸之學文寫之了、

印融滿八十二歲

〔已上五箇條、永正十一年甲戌十二月二十七日記畢、

印融滿八十歲

同十三年丙子五月上旬之候、爲松壽丸之學文寫之也、

印融八十二歲

〔已上五箇條、永正十二年正月十四日記畢、

印融八十一歲

同十三年五月上旬之候、爲松壽丸之學文書之畢、

印融八十二歲

〔已上五箇條、永正十二年乙亥正月十五日記了、

印融八十一歲

同十三年丙子五月中旬之比、爲松壽丸學文書之也、

印融八十二歲

〔已上五箇條、永正十二年乙亥正月十六日記了、

印融八十一歲

同十三年丙子五月中旬之候、爲松壽丸之學文寫與之也、

印融八十二歲

〔已上都合二十卷百箇條、爲初心弟子等之所要記之也、

印融八十一歲

已上五箇條、永正十二年正月十九日記畢、

印融八十一歲

同十三年自二月至五月、一部二十卷、爲松壽丸之所學書寫之也、

印融八十二歲

〔初  
問答鈔

〔初  
問答鈔〕 ○高野山寶  
龜院所藏

〔一本與書〕 永正十二年乙亥五月之比、爲龍王丸所學記之、

印一八十一歲

同十四年丁丑正月之候、爲松壽丸所學書之、

印一八十三歲

〔一本與書〕 永正十二年乙亥五月十八日記之了、是則爲龍王丸所學也、

印一八十三歲

同十四年正月之候、爲松壽丸之所望寫之也、

印一八十三歲 ○以下第二ヨリ第五ニ至  
ル本末與書異事ナキニ依

〔五供四重秘釋〕 ○高野山寶  
龜院所藏

〔供養四重秘釋〕

〔自野道抄拔書之、印融

爲得心加訓點、行法時音可讀、

〔護摩私記〕 ○信濃佛  
法寺所藏

〔三寶院（内題）私抄

〔密宗佛身建立〕 ○武藏寶  
生寺所藏

〔密宗佛身建立〕

〔三身成道之下地〕 ○武藏寶  
生寺所藏

密宗佛身  
建立

三身成道  
之下地

永正十六年八月十五日

三九七



永正十六年八月十五日

〔內題〕  
三身成道之下地

印融一〇

三九八

文筆問答鈔

〔文筆問答鈔〕

上  
〇延寶九年板本

〔內題〕  
文筆問答 卷上

印融記  
〇卷中・下內題異  
事ナキヲ以テ略ス、

〔寶生院經藏圖書目錄〕

第五  
第三十合

十八章反音抄

一十八章反音抄印融、聖印房

奧書曰、文明十九年丁巳十一月中旬之比、於王禪寺、爲松壽之稽古抄之了、（目）末

學印融

初學勸誘鈔

〔初學勸誘鈔〕

〇武藏寶生寺所藏

〔內題〕  
初學勸誘鈔

印融記之

訓釋得意抄

〔訓釋得意抄〕

〇武藏寶生寺所藏

〔表題〕  
訓釋得意抄印融記

〔作文大躰〕

〇京都府立圖書館所藏

物書次第

印融作少々

諷誦文・折紙・申狀皆通用也、凡雜筆有十三句、大樣或丟聲、或不去聲、任心有書事、不辨去聲事人、漫句・乱句何宜者也、

漫句者無字數、又無字對句、不去聲自在無礙也、（目）下略

〔諸宗章疏錄〕

下  
眞言

高野印融  
本朝第十八

大疏指南鈔九卷

大疏愚案鈔三卷

大疏詮要鈔二卷

柚保隱遁鈔十卷

釋論指南鈔十卷

釋論安養鈔三卷

釋論愚案鈔七卷

釋論名目二卷

住心論廣名目六卷

古筆拾遺鈔六卷

文筆問答三卷

金胎曼荼羅鈔二卷

金胎句義鈔四卷

光明眞言句義三卷

二十四帖

或合爲三卷

作法集口決一卷

三寶院護摩鈔二卷

三寶院流私鈔三卷

號後記

三西不同鈔一卷

〔西南院文書〕

〇紀伊

〇前シカラハ禪定ノ窓ニ薰スルハ貴キ者ナリケリ、廻向大并了、

文龜二年（壬戌）三月廿一日抄之了、南無大師遍照金剛、哀愍納受、護持佛子、普願

圓滿、  
印融六十八歳（〇本聖教ハ印融ノ自筆ニカ、ル、

永正十六年八月十五日

三九九

筆蹟



永正十六年八月十五日

主仙順房

塵袋

○東京國立博物館所藏

〔塵袋〕

〔表紙(別筆)〕先德印融法印自筆也、

〔一與書〕永正五年 辰十一月九日書寫了、雖非老師之詮用、只爲幼弟之才覺也、

印融七十四歲 〔別筆〕傳與玄昌

〔二與書〕永正五年 辰十一月十五日書寫了、

印融老身七十四歲 〔別筆〕傳與玄昌

〔三與書〕永正五年 辰十一月廿一日書寫了、

〔別筆〕無量光院先德印融御自筆 傳與玄昌

〔四與書〕永正五年十一月廿五日書寫了、

印融七十四歲

〔五與書〕永正五年 辰十一月廿九日書寫了、

〔六與書〕永正五年 辰十二月五日書寫了、

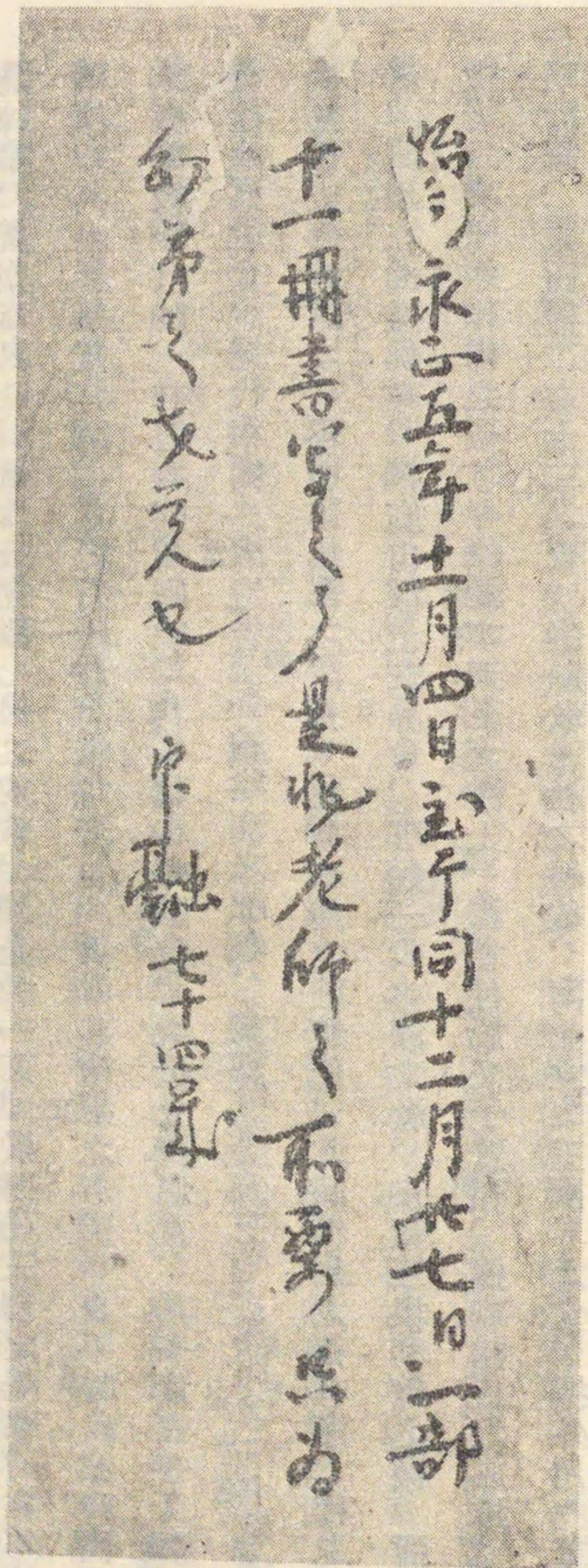
〔七與書〕永正五年十二月十日書寫了、

〔八與書〕永正五年十二月十四日書寫了、

〔九與書〕永正五年極月十七日書寫了、

〔十與書〕永正五年極月廿四日書寫了、

印融七十四歲



〔十一與書〕始自永正五年十一月四日、至于同十二月廿七日、一部十一冊書寫了了、是非老師之所要、只爲幼弟之才覺也、

〔稱名寺勸進帳草案〕

○武藏寶生寺所藏

勸進沙門々々敬白

印融草

永正十六年八月十五日

四〇一

武藏稱名寺勸進帳草案

四〇〇



永正十六年八月十五日

四〇二

請特蒙十方檀那恩施、令修理金澤稱名寺彌勒堂之狀、厥自古寺廢忘之修理、勝于新造堂舍之功德、今時勸進之方便、增于往日建立之願望矣、凡金輪御願之寺、依十方之勸進、帝王崇敬之山、依萬民之助成、遠尋先跡、聖武天皇勅行基菩薩、勸四衆而建立東大寺、後宇多院詔願行上人、進十方以再興教王寺、何況其餘諸寺諸山乎、粵有律家一寺、樹号稱名寺、人王九十代龜山院御宇、開基良觀上人、檀那平實時等也、先案其願主得行、律家爲棟梁、眞宗爲名匠、是故瑩五篇七聚之戒珠、耀光於一天、嚴四曼三密之覺華、施句於四海、其名譽難宣言語、其得行難載窮筆端者也、次尋其檀那之志願、自平時政第四代之末孫越後守實時、初建立阿彌陀院、其子越後守顯時、次造立釋迦堂、其子武藏守貞顯、後建立彌勒堂、三代相續三處造營、各勵建立之誠心、各盡修造之懇志、然間アミタ院者、表過去成佛之尊容、示極樂無苦之淨土、三尊來迎之粧無比、九品往生之相有憑、釋迦堂者、案現在成道佛身、構靈山淨土之界會、專說一代半滿之教、正救三根利鈍之機、彌勒堂者、案未來作佛之聖尊、標牽卒天上之淨土、釋尊付屬受于鷲嶺、彌勒慈氏之成道、表唱龍華、東西構二六十二之寶、案顯教密教之學徒、南北立二王兩界之堂、擬外用內證之守護、戊亥隅立多寶佛塔、案能說教主之舍利、丑寅隅一切經藏、納所說經王之金文、密藏積小野廣澤十三流之聖教、文庫入文書歌道一千卷重寶、惣出世之聖教盡軸、世間之書

籍極名、寺中之構勝于餘寺、僧中之誠超于他寺、而世爲濁亂、人爲貪婪、兵乱年々起、飢饉時々興、所以佛法退廢、魔法遂進成、寺領被奪俗徒、世財被取兵賊、是故一寺長老、無有住善、諸院僧衆、不能堪忍、因茲堂舍悉破壞無跡、院室損滅無形、纔殘彌勒堂一宇、悲哉、荒風吹勢破拔這地、暴雨漏水朽滅板敷、庭茂草橫路豎路迹絕、池涸水斜橋平橋落埋、見此廢退、朝々衆僧爛胸、思彼破壞、夕々諸人斷腸、寺大僧少、無心修理、地廣人狹、無思修營、不如蒙十方檀那之恩施、受四衆崇敬之助力、遂修造之願望、然則福貴之門、勿惜百兩百尺之金絹、貧賤之家、句耻一撮一文之米錢、難勸人能勸、菩提サ夕之悲願也、難施財能施、且ハラ密勝心也、凡微塵積而成高山、涓滴流而成大海、以勸進之功、滿修理之願、無疑者乎、若爾者、酬施財之懇心、預利生之得益、本尊加護之處、災禍雲不起、慈氏信心之床、福祐之月增光、加之、開現生安穩之榮華、結後生善處之妙果、仍勸進之志趣、盖以如件、

年号月日

勸進沙門々々敬白、

〔寶生院經藏圖書目錄〕

第五 第三十合

一十八章聞書仙順

一册

文明十四年八月十一日書之了、

悉曇末學印融

永正十六年八月十五日

四〇三



俊譽所撰  
ヲ通解抄  
書寫ス

永正十六年八月十五日

四〇四

〔通解抄西〕○武藏寶生寺所藏

右條々者、或承直師（道力）座訓、或撰祖師口決、爲初心始行、且記之、後生可悉之、

金剛佛子俊譽

長享二年申九月十八日書了、年來所持本紛（マ）紕之故、重早書之處也、此抄者鎌倉雪下相承院俊譽記之、於此抄之中、池記ト者、堀池僧正信證御記也、北御ト者、北院御室守覺法親王、御事也、左記ト云フモ同事也、一二ト者、牧（マ）寶御本也、宏一者、宏教御事也、元一者、元瑜御事也、遍知院ト者、西遍知院聖尊親王、御事也、

師云（看脱力）俊譽ノ直師貞雅御事也、

△云ト者俊譽ノ直師貞雅ノ御事也、

△云ト者記者俊譽也、

西院流末資印融

永祿拾卯年八月廿四日書、

密乘  
長圓（花押）

〔病中用心抄并佛法夢物語〕○武藏寶生寺所藏

長享二年二月中旬之候書寫之、予餘、無道心之間、爲苛責拙心、尋寫之也、

知道所用  
ノ病中及  
抄及ビ  
心抄及  
佛法夢  
語ヲ書  
寫ス

印融

文政九年十二月、於于南山高室槐林書寫之、

關東留學沙門寂印雪手

于時文政十二稔十一月下浣、雨降山主照道師、以上以二章令予摸寫之畢、

大山寺廣德主寂印再寫

〔韻鏡〕○武藏寶生寺所藏

本云（奥書）建長四季二月十二日書寫了、

明了房  
信範

本云（朱書）以多本令見合書之、就韻字假名、印融私付之了、

本云文明十九年亥陽七日、以印融御本書了、

覺範智眞

本云于昔長享（辛）武季（辛）戊申小春廿八日書訖、筆者順眞長傳於武州麻生郷王禪寺花藏院、以覺範本寫之、多年什賢御馮候間、爲形見寫進也、

傳領什賢眞

于昔福徳（延徳二年）貳年暮春十七日書了、

筆者智吽之

〔求主鏡任房〕

永正十六年八月十五日

四〇五

韻鏡ヲ書  
寫ス



永正十六年八月十五日

〔悉曇字記私〕○龍門文庫所藏

于時慶長十九稔三月朔日寫畢、偏興隆佛法、二世安樂ノ爲ナリ、

筆者賢尊房秀海

百年忌日

〔元和四年戊午八月十五日、印融法印一百ケ年ニ當ル、〕

〔参考〕

〔花押彙纂〕釋家印融

自著

# 印融

○武藏寶生寺所藏  
文明十八年丙午正月十一日傳法許可灌頂印信

高野山無量光院ニ住ス

〔通念集〕無量光院 中古、印融法印當院乃住持たり、抑法印ハ、本武州の産也、眼を

八宗の雪にさらし、心を三密の月にすます、聲明悉曇、あるひハ事相、あるひハ教相等乃經論章疏に涉り、末弟の爲に、數十部の書を制作し給ふ事、諸人のあまねく識知せる所也、其次覺融阿闍梨より、清胤・玄仙・玄廣等の、諸阿闍梨耶に至るまで、師資傳授し、稟承して、學徳深廣なりといへとも、著述ハ印融に及ハす、名も又共に隨ふ、FO上略

武藏三會寺

〔新編武藏風土記稿〕六十八 橋樹郡十一 三會寺 字嶋ニアリ、昔ハ字馬場トイヘル

所ニアリシト云、今モソノ邊ニ元屋敷ト呼所アリ、是ソノ舊跡ナリト云、寺領十石ノ御朱印ヲ賜フ、コレ慶長四年二月十日ノコトナリト云、其時ノ文ニ、武州多東郡小机庄鳥山村三會寺領十石ハ、先規ニ任セ寄附セラレシヨシヲノス、是ニヨレハ、北條家分國ノ時ヨリ、寺領アリシコトモシルヘシ、古義真言宗ニテ、紀伊國高野山法性院ノ末寺ナリ、瑞雲山本覺院ト號ス、右大將賴朝建立ノ密場ニシテ、ソノカミ宿徳ノ僧カハル替ル住セシト云、今開山トスル所ハ、等海ニテ、ソレヨリ前ノ住僧ノ名ハ傳ヘス、等海ハ應安六年九月十五日、或ハイフ三日ト寂セリ、ソノ後、印融ト云僧住職シテ中興ス、此僧ハ道徳殊ニ聞エアリテ、世ニモ宗祖弘法大師ノ再來ナリトイヒ傳ヘリ、○下略本朝高祖傳ニ同ジ、

同國舊城寺

〔新編武藏風土記稿〕八十八 都築郡八 舊城寺 除地五段許、村ノ北ノ方ニアリ、是モ同ク三會寺ノ末、久保山ト號ス、客殿六間ニ七間、南向

同國觀護寺

〔新編武藏風土記稿〕八十八 都築郡八 觀護院 除地四段四畝六步、村ノ南荒川主計

永正十六年八月十五日

四〇七



永正十六年八月十五日 十六日 二十日 二十一日

四〇八

六間、南向ナリ、本尊聖觀音、木ノ坐像、長二尺許、春日ノ作ナリ、開山詳ナラス、僧  
印融ヲ以テ姑ク開山トセリ、印融ハ久保村ノ産ニテ、同村舊城寺ノ住職トナリ、他山へ  
モ移轉シテ、後亦當寺ニ來リ、永正十六年八月十六日遷化ス、此寺モ古ヘハ八十石ノ御  
朱印ヲ賜リシヨシ、シハく回祿ニ逢テ、舊記等烏有セシカハ、後願ヘキ便リモナク、  
往事ヲ知事ヲ得スト云、コノワタリヨリ富士山ヲ眺望アルニヨリ、土人ハ富士見寺ナト  
、呼ヘリ、又寺前ノ水田ニ其形ノウツレハ、其田ヲ富士見田ナト、モイヘリ、  
十六日、丑、丁、細川高國・同尹賢、攝津ニ下向ス、

高國・高國  
近衛尙通  
ニ預ク

〔後法成寺尙通公記〕

十 八月十六日、丑、丁、晴、小雨下、今日京兆・典厩、攝州下向

云々、世間物念更不休、京兆以田邊、積一合預之、

二十日、巳、辛、和泉守護細川澄賢、和泉ニ下向ス、

〔後法成寺尙通公記〕

十 八月十九日、辰、庚、晴、小雨洒、心中念誦如例、和泉守護明

日泉州下向、爲暇乞來、令對面、勸一盞、

二十一日、午、壬、義植、信濃高梨攝津守某ノ、馬ヲ贈ルヲ謝ス、

〔御内書案〕

乾

馬二匹鶴毛、鹿毛、到來、悦喜候也、

永正十六

八月廿一日

(伊勢貞隆)  
同御調進

高梨攝津守とのへ

二十三日、甲、足利高基、小田政治ノ部將菅谷勝貞ノ戦功ヲ褒ス、

〔書上古文書〕

七

今度令參陣、抽粉骨走廻神妙候、爲御感、改御書札被下之候、謹言、

永正十六年

(尾利)  
高基

判

八月廿三日

(勝貞)  
菅谷攝津守殿

〔下總國舊事考〕

四 古河足利氏世紀

政氏、敍從四位下、任右馬頭、○中 永正十六年八月、

政氏黨與高基黨戦于上總椎津、小田政治家臣菅谷勝貞有戦功、高基與書賞之、

○高基、勝貞ノ、若泉五郎左衛門ヲ常陸土浦城ニ攻メテ殺スヲ褒スルコト、十三年

八月二十四日ノ條ニ見ユ、

越中椎名慶胤、土肥松鶴ヲシテ、同國富山・横江ノ兩保ヲ安堵セシム、

〔上杉家文書〕

今度新九郎殿之儀、御忠節候、然上者、富山之保并横江保不可有相違候、委細馬杉中務

永正十六年八月二十三日

四〇九

書札ヲ改

上總椎津  
ノ戦功

節新九郎忠



永正十六年八月二十六日

丞可申候、恐々謹言、

永正十六年八月廿三日

土肥松鶴殿

進之候

二十六日、丁亥前天台座主三千院二品堯胤親王薨ゼラル、

〔永正十三年八月日次記〕 永正十六年八月廿六日、前座主（堯胤親王）梶井宮 御入滅云々、愁涙

萬行無極者也、仁和寺諸記抄同ジ、

〔再昌草〕 ○宮内廳書陵部所藏 永正十六年九月、

卅日伏見殿より、

身の露のきへてかなりの悲しみも秋や人の別とそしれ

八月廿六日、梶井宮前天台座主二品堯胤法親王、かくれ給し、六十三歳、その事などおほしめしたるなるへ

し、これより二日に、

陰たのむ山もかれにし秋の後いひやらむ露のことの葉もなし

〔東寺過去帳〕

梶井宮法親王〔裏書〕「永正十六九廿六、叡山座主、中堂供養導師、」

六十三歳

貞敦親王  
三條西實  
隆贈答ノ  
甲歌

四一〇

椎名  
慶胤（花押）

貞常親王  
御子

御俗諱高平

享祿三年  
三月二十  
六日薨ズ  
トノ説

法親王宣  
下ヲ受ケ  
ラルトノ  
説

〔諸門跡傳〕

○華頂要略百四十一所收 圓融坊

二品

入道堯胤親王後花園院御猶子 伏見貞常親王息

母從二位盈子、左大臣教秀（勸修寺）

公女、異本、贈（鹿田）一品重有女、

應仁二年四月廿七日、入室、十二文明三年閏八月十日親王宣下、俗諱高平、上卿日野大納

言資綱卿、奉行藏人右中辨兼顯、同年月日得度、十五同年九月十五日、奉授鎮將

夜叉法於主上、（最澄）傳教大師奉授桓武帝有例云々、依件賞、則日叙二品、奉行藏人左少辨元永明應二年四月晦日、補

天台座主、永正九年九月廿三日、於清涼殿勤懺法講、同十五年四月四日、根本中堂

供養導師、同月六日、拜堂、同月九日辭座主、享祿三年三月廿六日薨、七十四歳、號後壽量院、イ永正

十六八寂一〇天台座主記異事ナシ

〔寺家法眼養想説、應仁二年四月廿七日御入室、即日御得度、文明三年閏八月親王宣下也、仍法親王ニ而、非入道親王云々、可有後勘〕

〔官職便覽〕

二十一會綱上 法親王以下之事條

梶井御門跡

堯胤法親王 座主、根本中堂供養導師、證誠兼帶、後大通院御子、後花園院御猶子、

〔門跡傳〕 梶井殿 又者梨本門跡

堯胤法親王 伏見殿、後大通院貞常親王息、後花園院御猶子、母從三位盈子、贈一品重

有女、俗名高平、

永正十六年八月二十六日

四一一



永正十六年八月二十六日

〔尊卑分脈〕源氏 崇光

貞常親王二品、式部卿

一邦高親王二品、式部卿

一堯胤法親王文明六、六、十九、立親王、十九同七、八、十七、式部卿、同八、正、六二品、

一仁、無品、御家上親院、道永法親王改一什、

一東常信法親王勸修寺、改覺圓、

一釋等貴相國寺住持、万松軒、宗山、

一山、天台座主、覺胤法親王妙法院、

一山、二品、大僧正、慈運竹裏、

一寺興譽法親王聖護院、○伏見宮御系譜・本朝皇胤紹運錄・皇親系異事ナシ、

〔堯胤親王自署覺胤親王得佛記〕

○京都妙法院所藏

傳法灌頂所

永正十二年乙亥十一月十一日甲午、丑時、是曜宿和合日時也、因之即汲井花水、當結誦一切

支分生印明、加持護念、將於汝頂上灌之、若不以此印明者、則法式不具、不能住菩提

心、則有退轉與、空灑香水無殊也、若以此法而灌者、即是同於十方諸佛、灌以法水而授

法王位也、不余者、徒灌而已、无能爲也、則於南〔德〕膽部州大日本國皇都長隅比叡山延曆

寺、更建立於灌頂道場、晝授佛性三昧耶戒、夜先向蓮華胎藏悲生曼荼羅投華、當華開敷

如來正位、名平等金剛、次向金剛界解脫輪大曼荼羅投花、當寶生如來正位也、名爲平等

金剛、即與授三部密印道具等、付囑傳教阿闍梨位大灌頂已訖、仍爲後代記傳法之由、付

與弟子無品覺胤親王如件、

灌頂阿闍梨座主二品堯胤親王示

〔胎藏界灌頂印信〕

○京都妙法院所藏

王舍城比叡山延曆寺灌頂道場所

略○中當寺座主前大僧正法印大和尚位公承阿闍梨傳付堯胤也、堯胤忝遇聖運、傳弘秘教而

今生及六旬、早不傳付恐空墜歟、故授五瓶灌頂、以此胎藏界大教王、傳付覺胤親王訖、

所願秘教遠布、福利群生、法眼遍照、俱登極位、

永正十二年乙亥十一月十二日乙未

延曆寺座主傳法阿闍梨二品堯胤親王

〔再昌草〕

○宮内廳書

○陵部所藏 永正十七年八月

廿六日、故前座主後壽量院、堯胤法親王、周忌を思いて、伏見殿へ申侍し、

永正十六年八月二十六日



永正十六年八月二十六日

四一四

たとふへきかたみをとはんかたもなしかくれしたふの山のはの月  
返し

めぐりあふに比叡の山の秋の月かへらぬ影をかたみとそしる  
大永元年八月、

廿一日、來廿六日故梶井前座主第三回品經歌すゝめられしに、

嚴王品勅題、

身の上に出しひかりやたらちねの心のやみをてらし初けん  
壽量品すらせてまひらすとてつゝみ昏に、

のこりゐておふのうらなしもとのみのみとせの焔になるもいかなし  
これを御覽して、入道式部卿宮より、

みとせまてなれるなこりよおふの浦かたみのなしのもとの歎は

〔爲和卿集〕

大永元年也、廿三日改元、八月廿六日梶井法親王堯胤去年うせ給けるに、當年人々一品經よませ給

ひけるに、勸持品、

まよふへき心のやみもすみのほる月にさへらぬかせの浮くも

〔筆陳〕

下二 ○保阪潤治氏所藏



少

堯胤

神無月はなみてくらす春よりもなをひととせの行衛をそ思

夏草

堯胤

かきこもりことしもむすふ夏草のたかねの室はとふ人もなし

〔手鑑短冊〕

○伊勢長谷川次郎兵衛氏所藏

冬澤露

堯胤

冬枯の澤におれふすふちはかまみしふを色にのこる露哉

〔古筆懷紙〕

上 詠三首和歌

宮城野

堯胤

永正十六年八月二十六日

四一五



永正十六年八月二十六日

四一六

いつれ尙みたれかまさる秋風にしのふもちすり宮城のゝ露

明石浦

鐘ひゝく松は岡邊にかくろへてあかしの月そ浪にすみゆく

筑波山

つくはねの新桑蠶に曳糸のふしなれぬ間にたえむとやする

〔雪玉集〕

十四 文龜元九十三夜雜言冠置一字

ならの葉に時雨をとしてそよ更に月の名におふ空としもなし  
かきりあれハみねよりうへに月深てかたしく空に残る山かせ  
つみからすかたみはかりにおり過る山路の菊の霜ないそきそ  
きのふはといひし時雨のふるといいつくの山も秋ハおほえて  
軒ちかきかきほのもみちこゝろをも我にへたてぬ秋をそめつゝ  
とにかくに物おもはする月にこそとはりしるき老もそふらめ  
をくれてもさきにほふ花ときくからに身を忘るゝもうき程そかし  
かたみとも後にハ忍へもろき身の露こそかれめうへししら菊  
あさきかたにみるへくもあらず染かへてうき世を秋のみねの梢は

九月十三  
夜ノ御詠

北杣樵士

またいつにこよひもまたん月をしも逢人からのしのゝめの空  
りようかんのかすみにのほる秋のきて月にあまかける影そかなしき  
みやのうちを恨し秋はかはるともいさかゝりきやきくのうへの露  
よゝをふるわか山風の霜の葉に秋よりあきをまかせてやみむ

（翁詠法親王）  
北杣樵士

此御返し程へてたてまつりし、

なか空にはれ行月を待出ておもふにもうきよひの雨かな  
から衣雲をかたしくみねの庵の夜さむを月に思ひやりつゝ  
摘のする花ハすくなき籬にも月をさかりと匂ふしらきく  
木々の色日々に染ます四方の秋を我山のはとあかすみるらし  
のほるとい遠きもみるにちかゝれやつゝらおりなる山のみちは  
年ハはや四十もすきぬ秋の月我にまとはぬひかりみせなむ  
をそくさく種をそ菊のわきてうへん霜より後の秋のかさしに  
かけていのる末も今より長月の千世をかさねよ宿のしら菊  
あたなれやとハむと思ふあらしもうき世のつねの峯のみちは

三條西實  
隆ノ返歌

永正十六年八月二十六日

四一七



御製ヲ賜フ

待さとのいつくハ有ともあきの空みる人からを月やわくらん  
綸言のわすれかたきを花に思ひ月にしのひて秋もいぬめ敷より  
みぬ世まで思ひしるらん宮の中の秋をさそなと菊の上の露  
世にちらせ此長月の十日あまりみよとをきける露のとの葉  
この事を聞き召て、御製を座主の宮にたまひせし、

なか月の名におふかけもみさりしハ時雨し袖や世におほひけむ  
かたしきの雲をハ袖にはらハせて山風またす月やすむらん  
つれもなきためしにきくの花ならハみやまの松の霜の後まで  
北にすむ谷の扉の木々の色も分て時雨の方やみすらん  
法師の闕伽たてまつる花もみち折ちらしてもおしけくもなし  
時しもあれわれそ思ひの秋の月老にとハる數にもれても  
をのゝえの朽し山路の秋のきて身く敷を忘れてハ君そみるへき  
かれゆくハなへての花の露の上を菊になかけそ萬代のあき  
あたし世の色香の外にそめをける心この葉のあきをとりや  
待出てふくるを月もしたふらんみる人からの袖のわかれに

御禮歌

諒闇に月の光もわかさりきあしの簾のうしやよの中  
みるまゝにをとろえゆきて菊の露たか身のうへに又うらむらん  
よのつねのもみちにしらぬ霜をへて山としつもれかゝるとの葉  
十月三日、この御製かたしけなきよし申されて、  
あまつ露かけてもしらぬとの葉や山としつもるはしめなるへき

堯胤上

御連歌

〔新撰菟玖波集〕

五 秋連歌下

文明十四年五月廿五日、内裏にて百韻の連歌に、

風のこゑをさゝにのみやのこるらん

み山の月におつるあさ露

二品法親王堯胤

〔新撰菟玖波集〕

十 戀連歌下

長祿三年四月、家にて百韻の連歌に、

袖には春もわかぬわひ人

吾なみたなにゆへ月に霞むらん

二品法親王堯胤

延徳四年二月庚申の夜、春日社に奉らせ給ける百韻連歌に、

いまハ身のいのちを懸る物思ひ

こゝろにむかふゆふくれのそら

二品法親王堯胤

永正十六年八月二十六日



永正十六年八月二十六日

四二〇

〔新撰菟玖波集〕

十六 雜連歌四

文明十六年潤十一月廿五日、内裏にて百韻の連歌に、

あわれのかすをつくす秋かせ

露の世ヤタ／＼にうつるらん

二品法親王堯胤

〔新撰菟玖波集〕

十八 釋教連歌

うたかひのあるはまことの有にて

何をかたちのこゝろとかみむ

二品法親王堯胤

〔座主宣命〕

茲一鈔者、後壽量院宮故天台座主 堯胤親王、座主記上下兩卷被製緝、予不慮一覽之日、〔坐勢九〕率馳筆、以宣命并使等分明分鈔出畢、寔自上世之儀、觸愚眼、踴躍以不堪言也、近代内記之草、如案相違多端畢、文章之新作却無益歟、只如例文可草進事、尤可爲本儀哉、臨時宣命新作法式也、定例之草何用新述、依之簡要之文段令漏脱者也、爲後儒聊記委旨畢、此鈔不可出于傍家、可秘々々、

御著書  
座主記

大永二年夏四月下旬候筆之訖、〔東坊地〕五更老儒亞槐菅和長  
〔和長卿記〕六 菅別記 同十七日、庚辰、雨下、自今日禁中被始御八講、〔中〕夕座不移刻雖被相始、既及黄昏、仍有掌燈沙汰、〔中〕奉行申云、安元度六位藏人置切灯臺於平座之

御記

前由分明、又明應度六位藤原資直〔富小路〕置之由、故座主宮後壽量院堯胤親王御記有之、可任彼等之由被仰下、

魚山御法

〔魚山の御のり〕

堯胤法親王

〔上〕此度の御講につきては、彼ふしハかせ、うち／＼の御けいこに參内して、かゝる山かつさへ、おもひ出おほう侍しになと、後代にもこのしをくへきを、とかくをこたり侍るに、せめて一筆もつけしらせて、雲井の御法のとまりぬる念なさを、すこしもはるけ侍らんと、〔三條四廣傳〕頭中將あなちち申送て侍れば、二日をかけて見聞し給ふるかひもなく、いなとひきこえかたう、はや月もへた／＼りぬる事を、かたはしおもひおこして、かうつたなき物から、いさゝか硯凍をたゝき、筆露をしたて侍る也、僧名など家記にひきうつされて侍らん日、則返さるへきをや、時に文明八のとししすの十日比に、〔愚〕漁山にしてこれをしるしつけぬ、〔全文ハ文明八年十二月二十七日 後花園天皇七回聖忌ノ條ニ收ム、〕

〔實隆公記〕

四

文明九年正月二十九日、戊辰、晴、寒嵐甚、今日猶候御所、魚山御法、

梶井無品法親王 儀法御記也

〔三千院圓融藏重書目録〕

甲

一御儀法講記 堯胤親王筆、 卷首闕

一卷

御儀法講  
記

永正十六年八月二十六日

四二一



永正十六年八月二十六日

四二二

一御藏法講次第堯胤親王筆

一通

一堯胤親王調進次第也、雖有伽陀文字、悉略也、

〔中堂供養御表白〕○近江明德院所藏

〔表紙裏〕座主宮御自筆

花王藏 授與尊慶

中堂供養御表白永正十五

堅者實清

〔忝以梶井宮殿御自筆御本奉寫之訖、

信秀四十八戒卅八

永正十五年六月 日

同十六年九月日、以岩本坊宗舜本寫點了、

岩本坊本云、

永正十五年五月廿二日、參候梶井宮、以御本奉寫之訖、忝於御前被依仰下尊言、私本點

華王藏

之畢、御本一向无點云々、元祿十年丁丑冬十一月七日、以前大僧正秀算本書之、

兜率谷

雞頭院嚴覺洪道記

文政十一年戊子十一月上旬日、以右本令書寫之了、

台岳東塔執行探題兼戒坦院知事

前大僧正護法金剛豪實〔花押〕

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲百廿一

〔禁裏御八講御記并御八講次第延德二四廿六、嘉樂門院第三回〕○本文ハ延德二年四月二十八日、嘉樂門院第三回忌辰法華八講ヲ、清涼殿ニ修セラル、條ニ收ム、

〔妙法院所藏重書目錄〕六三十八ノ箱

梨本堯胤御自筆記 嘉樂門院三回御忌延德二年御八講記 一冊

〔斯記未知誰人所記、恐覺胤親王御記歟、或案假名記曰、梶井宮毎日聽聞、應是堯胤親

王記歟、更詳之、堯恕書後加吟味之處、堯胤親王日記ニ決定、

〔辨才天法〕○山城妙法院所藏

〔奥書〕本云明應戊午十月丁亥、於圓融房書之、靈應之事所私勘也、此本賜貞意律師、永爲師迹

之寶、梶井宮堯胤座主如此被加與、書、常寂院貞意賜也云々、

〔三寶院文書〕六十九

○山城

御自筆狀  
四日の御程なさ、いまさら又御あひれをもよほし候、心中もおなし事にかすくをしかりおほせをいしまし候、こんしのしるしかり一品進上候、御筆の御經の嚴重なる御事にて、御供養のき、如仰めてたく遂行のち、光明真言百座申候て、申さた仕候へ候、  
やかて申入候へ候、一筆申入候よし、よく御心え候へ候、

〔別紙〕文庫三十一 廿九日 いたれにても御局へ

堯胤

永正十六年八月二十六日

四二三



永正十六年八月二十六日

四二四

知仁親王  
御元服  
ヲ賀セラ  
ル

〔三千院文書〕

十一  
○山城

御元服之儀、無一事文違亂被遂其節候之由、うけ給候、千秋萬歳、珍重に存候、殊御參内已下、舊儀に無相違、嚴重の御沙汰ともにていらせをいしまし候つるよし、おほせられ候へい、しかしながら、宮中の御再興、返々めてたく存候、かならず、令參賀、なを、申入候へく候、あな、し、

(知仁親王の  
わか宮の)

御かたへ 誰にてもの御局へらる

堯胤

○堯胤法親王、三千院圓融房ニ入室アラセラル、コト、應仁二年四月二十七日ノ條ニ、親王宣下ノコト、文明三年閏八月十日ノ條ニ、後土御門天皇ニ懺法例時ヲ授ケ奉ラル、コト、八年十月二十三日ノ條ニ、北野宮寺別當職ヲ管領セラル、コト、九年六月二十六日ノ條ニ、鎮將夜又法ヲ授ケ奉リ、二品ニ敍セラル、コト、十年九月十五日ノ條ニ、灌頂ヲ行ハル、コト、十三年十一月二十二日ノ條ニ、天台座主ニ補セラル、コト、明應二年四月三十日ノ條ニ、後土御門天皇御誕辰ニ、壽命經供養ヲ行ハル、コト、同年五月二十五日ノ條ニ、勅ニ依リ、土佐光信ノ畫ケル普賢延命像ノ開眼供養ヲ行ハル、コト、四年六月十三日ノ條ニ、天台座主ヲ辭セラル、コト、八年七月二十日ノ條ニ、延曆寺衆徒等、座主御復職ヲ請ヒテ允サル、コト、同年八

花押

月四日ノ條ニ、幕府、法親王ノ足利義尹ニ通ゼラル、ヲ疑ヒ、其寺田ヲ收ムルコト文龜元年五月二十三日ノ條ニ、勅ニ依リ、延曆寺根本中堂三菩薩塑像ヲ再造セラル、コト、永正三年二月二十八日ノ條ニ、義植ヨリ、美濃美江寺ニ普門品ノ寄進スベキ御染筆ヲ請フハル、コト、十三年十一月二十九日ノ條ニ、延曆寺根本堂中供養導師御參勤ノコト、十五年四月四日ノ條ニ、天台座主ヲ罷メラル、コト、同年同月九日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押藪〕

一  
法親王

梶井  
堯胤法親王  
伏見貞常親  
王第一子

天台座主永正十年六月八日薨



〔舊華押譜〕

梶井殿堯胤無品親王



永正十六年八月二十六日

四二五



永正十六年八月二十九日

四二六

二十九日、庚寅若狹守護武田元信、同國神宮寺供僧等ノ、濫科又六給所内ノ田地ヲ押領スルヲ停ム、

〔神宮寺文書〕○坤若狹

供僧等支  
證ヲ出帶  
セズ  
以後ノ出  
帶ハ許容  
セズ

濫科又六給所内、號彼岸田申掠被<sup>〔崩カ〕</sup>給田地事、又六申子細在之、<sup>〔被カ〕</sup>糺明處、供僧中不被帶支證條、不及是非次第也、既又六數十年當知行不紛上者、被仰付訖、年貢等有納所儀者、早可被還付又六、今度無出帶上者、自然於向後以支證雖被申、不可有御許容、此條々可申由候也、仍執達如件、

永正十六  
八月廿九日

元勝（花押）

國高（花押）

上下宮供<sup>〔俗中カ〕</sup>

大内義隆、長門住吉社ニ、太刀・馬ヲ寄進ス、

〔長門一宮住吉神社文書〕○長門

奉寄進

長門一宮御寶前<sup>〔住吉社〕</sup>

太刀一腰

神馬一疋

右所奉寄進之狀如件、

永正十六年八月廿九日

從五位下周防介多々良朝臣義隆<sup>〔大内〕</sup>

是月、義植、細川高國ヲシテ、畠山順光ヲ援ケ、大和ノ暴徒ヲ擊タシム、

〔御内書案〕乾

就和州諸軍人出張之儀、急度差遣一勢、<sup>〔畠山〕</sup>順光ニ合力候者、可爲神妙候也、

永正十六  
八月

同御調進<sup>〔貞應〕</sup>

細川右京大夫とのへ<sup>〔高國〕</sup>

○高國ノ兵、敗績スルコト、十月二十七日ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔法自相〕○興福寺所藏

表紙之裏書ニ曰、

此一卷者、永正十六之曆八月三十日、菩提山寺炎上之齋、報恩院亂入之凶徒取散之聖教之内、令披閱之處、云御草之御筆、當題二義之淵源也、秘中之秘物、不可過之、外

永正十六年八月二十九日

四二七

大和菩提  
山寺兵燹  
ニ罹ル



見可禁制之而已、

圖書寮官人上座、下座ノ内侍所御神樂御幣ノコト等ヲ違亂スルヲ訴フ、  
〔京都御所東山御文庫記録〕丙八

圖書寮官人上座允屬謹言上、

- 一内侍所御神樂御幣、下座、四方拜、正月、香呂上申事、
- 一日吉之社四色御幣、樂、禰宜、扇四十本、兩座上申事、
- 一公方様御八講、六月廿日より出仕申鐘鳴事、
- 一年中毎日縮紙上申事、
- 一河原御杖之時、六位馬上貳騎、上座允屬十七番目御供申、〔事殿方〕
- 一御即位大嘗會之御時、天香燒事、
- 一しんひつ之御八講薪行道御時、大床ハ昇殿仕、衣被お賦申、御布施別申事、此外臨時之御役、何時モ上座允屬勤申事、先々如斯、以此旨、先年山門中堂供養乞、今度就御即位、大嘗會時、爲下座違亂不可申由、堅申被定條候、上座屬承候お、今兎角下座被申事、言語道斷次第也、若有御不審者、御倉屬等兩人罷出可申明候、就中、任先規之旨、幾重爲上座歎可申候、此分堅被仰候、〔香殿方〕忝可奉存候、粗謹言上如件、

永正十六年八月 日

下座約定  
ヲ守ラズ

九月 大盡  
壬辰朔

二日、巳、癸醍醐寺理性院宗永ヲシテ、知仁親王上臈萬里小路榮子御著帶ノ加持ヲ行ハシム、

〔嚴助往年記〕上 九月二日、親王御方上臈萬里小路局〔榮子〕、帶加持之事、被仰出之、

今日持向之、〔宗水〕僧正御房被勤之、其趣遙已後、御馬一疋、御拜領之也、

○王女御誕生ノコト、十七年二月二十二日ノ條ニ見ユ、

五日、丙、甲幕府、山城寶幢寺鹿王院領同國西七條地利五段ノ地ノ名主ヲシテ、其代官職ノ違亂ヲ停メ、未進ノ年貢ヲ進濟セシム、

〔鹿王院文書〕○山城

鹿王院領城州西七條地利五段坪付在之、事、於代官職者被申合大志万平左衛門尉條、任去永正

十四年十〔一カ〕月十三日公方御下知旨、令停止違亂、同年々未進分等、速可致其沙汰彼代之

由候也、仍執達如件、

永正十六  
九月五日

〔中書〕秀綱（花押）

當所名主中

六日、丁、酉石見小笠原長隆、同國井原某ノ戰功ヲ賞シ、豊後守ニ任ズ、

永正十六年九月二日 五日 六日

四二九

宗永馬ヲ  
拜領ス

大志萬平  
左衛門尉  
ニ申合ス



永正十六年九月七日

四三〇

松尾口ノ

今度佐波動之時、於松尾口、首一討捕、高名神妙之至候、仍受領申付候、爲後日感狀如

永正十六年  
九月六日

長隆(小笠原)  
(花押)

井原豊後守殿

去四日、佐波動之時、於君谷表松尾口致合戰、太刀打首一討取候、尤高名之至候、仍被

任豊後守由候、面目之至此事候、彌忠節祝着候、如何様連々可令分別候、恐々謹言、

永正十六年  
九月八日

長德(小笠原)  
(花押)

井原豊後守殿

七日、戊辰三河松平信忠、同國妙心寺ヲシテ、同寺領田畠及ビ寺中・寺外

ノ地ヲ安堵セシメ、諸役等ヲ免除ス、

〔三川古文書〕

額田郡岩津妙心寺領之事

右田畠并寺中・寺外等、如前々、於後々末代寄進申上、不可有相違也、爲勅願所之旨、

勅願所  
ルニ依リ  
諸役ヲ免

小笠原長  
德

寺中・門前諸役等、免許之訖、仍如件、

永正十六己卯年九月七日

松平左近藏人  
信忠(花押)

妙心寺

○信忠、妙心寺ニ大般若經ヲ寄進シ、又制札ヲ掲グルコト、便宜左ニ合致ス、

〔朝野舊聞哀藁〕(孫平) 信忠君御事蹟

岩津村妙心寺御由緒略記曰、信忠公、永正十六卯年九月、大般若經被遊御奉納、御武運

長久、御子孫御繁榮之御祈禱被仰出候、每歲正月十一日・五月十一日・九月十一日、大般

若經轉讀仕、御祈禱奉執行候、

又曰、信忠公、永正十六卯年九月、三ヶ條之御制札を被下置候、

九日、庚子即位式ヲ舉ゲントシ、大神宮ニ由奉幣使ヲ發遣シテ、之ヲ奉

告ス、尋デ、一社奉幣使ヲ發遣ス、

〔公卿補任〕四十

權中納言正三位藤尙顯、(勸修寺) 四十 九月九日、由奉幣奉行、今日著陣、

參 議正三位菅爲學、(五條) 四十 九月九日、兼文章博士、依大内記輕服、(外祖) 伊勢幣宣命草進、

爲此俄兼任翰林云々、

永正十六年九月九日

四三一

由奉幣  
行勸修寺  
尙顯爲學  
文章博士  
宣命草進  
兼任

武運長久  
子孫繁榮  
ヲ祈ラシム



永正十六年九月九日

四三二

近衛尙通  
由奉幣使  
發遣以後  
位式ヲ以テ  
ニ遲滞スル

〔後法成寺關白記〕

永正十六年自十一月廿六日至廿日裏文書  
○陽明文庫所藏

由奉幣事、大禮以後遲怠不可然、先可被取行之歟、且神慮叵測、不道不行、其謂之乎、

○上下略、本文書ハ近衛尙通ノ自筆ニカ、ル、本文書ノ草案、本日記ノ紙背ニ七通アリ、今其内判讀ニ便ナルモノ一通ヲ示ス、本

〔資定卿記〕

○柳原家記  
錄百三所收

(永正)

同十六年九月八日、上卿勸修寺中納言、尙顯卿、辨資定、御即位由

奉幣也、

〔御即位由奉幣次第〕

由奉幣使  
發遣ノ陣

上卿着仗座、與、職事來仰々詞、可被發遣伊勢太神宮於奉幣日時令勘申ヨ、次上卿移着端

座、召官人令敷軾、其詞ヒ、次上卿以官人召辨、右中辨コ、辨參軾、上卿仰日時勘文事、次辨

進日時勘文、次上卿以官人召外記筥、其詞、外記ニ筥持參レ、次上卿起座、就弓場奏聞、外記、

職事奏聞畢返給、仰云、勘申依、上卿取笏、次上卿歸着陣、外記置筥進、次上卿以官人召

辨、下日時勘文、辨結申、上卿仰云、勘申依ニ、次上卿以官人召外記、返給筥、次職事

就仰々詞、〔軾〕可被發遣伊勢太神宮於奉幣宣命令作ヨ、御即位十九年延引、可爲來月事、可

有辭別、已上、次上卿以官人召内記、内記參軾、上卿仰々詞、如職、此間職事就軾覽内藏寮

請奏、上卿披見了、則返給、次外記參小庭申云、使王御馬申、次内記持參宣命草、入筥、

草奏、上卿披見了給内記、則起座、内記、進弓場奏聞、此次使王申御馬事奏之、職事取筥、次職

御即位式  
引十九年  
辭別

廢務三箇  
日

神祇官ノ  
儀

事奏聞了返給、仰云、令清書ヨ、使王申御馬、聞食ス、次上卿歸着陣、内記置宣命筥、

上卿則下内記、仰云、令清書ヨ、次内記持參清書、上卿披見了起座、就弓場奏聞、職事

奏聞了返給、仰云、聞食ス、次上卿歸着陣、内記置宣命筥、上卿則給内記、次職事就軾

仰云、自今日廢務三ケ日、止音奏警蹕ヨ、次上卿以官人召外記、々々參進、仰云、使王

申御馬、聞食ス、自今日廢務三ケ日、止音奏警蹕、次上卿召官人、令撤軾、其詞ヒサ、則

揖起座、上卿參神祇官、入北門、於都、辨、外記、史出門列立、上卿向上首揖、辨以下答揖、

次上卿着北門東腋座、西面、兼、外記着同門座、東面、先於北廳有幣褻事、辨、東面、史、官掌、

西上、忌部、北面、次上卿令召使召外記、外記參軾、上卿仰云、使王ハ候ヤ、申候之由、上

卿仰云、令候ヨ、次上卿以召使召辨、辨參軾、上卿問幣物具否、辨申具之由、次上卿起

座、着北廳東腋座、上卿、辨、東上、外記、北上、召使不着之、蹲居便宜所、内記持參宣命

筥、置上卿前、不待、次幣使發遣、上卿已下平伏、次上卿以召使召使王、使王就軾、上卿賜

宣命退、次自下薦起座、内記取筥退、次人々退出、使王自東門出、

永正十六年九月九日、御即位由奉幣也、但以例一社奉幣被擬之者也、上卿勸修寺中納

言、辨資定也、今度大内記輕服、外祖、仍宣命、父宰相爲學卿俄被仰翰林事、草進之、

〔拾芥記〕 下 九月九日、於官廳有伊勢一社奉幣、又別可有由奉幣處、諸下行難事行之

大内記爲  
康輕服ニ  
依リ父爲  
學宣命ヲ  
草ス

永正十六年九月九日

四三三



永正十六年九月九日

四三四

條、宣命辭別書載由奉幣之儀、今度大内記爲康依輕服、母方不草進之、仍予雖參議、去  
 六日俄令兼任翰林草進之、清書綠紙、無平出闕字、草者宿紙、有平出闕字之處、假令、  
 如天皇者平出也、如天照、皇太神、宸儀者闕字也、奉行職事右少辨集書賴繼、前日以内狀付  
 宣命於右少辨、其狀以杉原一枚書之、以一枚爲裏紙、以一枚立文之、上書官如儀式、  
 天皇我詔旨止、掛畏岐伊勢度會乃五十鈴乃河上乃下津石根爾大宮柱廣敷立氏、高天原爾  
 千木高知豆、稱辭定奉留天照坐皇太神乃廣前爾、恐美恐毛美申賜者久申久、忝以薄德豆、天之  
 日嗣乎傳賜志與以降、十有九年徒爾移禮、然爾即位雖得期毛、行幸難辨備志、依豆就里  
 内岐刷宸儀比、令行大禮氏、欲固洪基須、治天下國家免、安宗庶社稷古度、匪管賢佐須、偏  
 是神助奈利、是故爾、可即位岐由乎被告申禮、幣使乎令發遣免、吉日良辰乎擇定豆、王從五  
 位下兼盛、中臣正四位下神祇大副大中臣朝臣伊忠等乎差使豆、忌部從五位下齋部宿禰親  
 行加弱肩爾大繩取懸豆、禮代乃大幣乎令捧持豆、奉出賜布、掛畏岐皇太神此狀乎平久安  
 久聞食豆、天皇朝廷乎寶位無動久、常盤堅盤爾夜守日守爾護幸給豆、感堯日舜風之時志、  
 歸周道漢儀之昔氏、一天昇平爾、八紘靜謐爾、護恤賜倍度、恐美恐毛美申賜者久申、

永正十六年九月九日

〔永正十五年一社奉幣使參向記〕 一永正十六年九月十四日、一社奉幣次第大概如

幣物ノ分

先規、但今度御馬波祭主仁可納由、澤地藏人・藤波三郎兩人爲使、官長宿館仁豆終夜懇  
 望申、官長波、先規毛神宮爾給乃間、可任例由雖被申、兩使堅申間、今度計波預申乃由仁  
 豆遣之、又錦綾波神宮爾奉納、子良乃齋館爾預置、同辛櫃波一禰宜爾納、同卷布波物忌乃  
 神事爾順志、役人等分配了、

〔度會常有家引付〕 (永正)同十六年九月廿四日奉幣、錦綾、如前年請取之、

○五條爲學ヲシテ、文章博士ヲ兼ネシムルコト、便宜合致ス、ナホ一社奉幣使ヲ發  
 遣シ、即位式ノ舉行ヲ祈請スルコト、十五年十一月三日ノ條ニ、世上騷亂ニ依リ、  
 即位式ヲ延引スルコト、十六年十月十日ノ條ニ、即位式ヲ舉行スルコト、大永元年  
 三月二十二日ノ條ニ見ユ、

### 重陽和歌御會、

〔再昌草〕 十九 永正十六年己卯 六十五歲

九月九日公宴 菊花色々

うへし時わか葉の菊のあさみとりかゝる千種の花とやのみし

〔今川爲和集〕 一 菊花色々 (永正十六年九月九日禁裏御會)

おなし名も色にわかれて開菊の匂ひハ露もかゝらさりけり

永正十六年九月九日

四三五

三條西實  
隆ノ和歌

冷泉爲和  
ノ和歌



永正十六年九月十一日

四三六

十一日、壬午近江守護六角定頼、同國永源寺且過寮領ノ百姓ヲシテ、年貢ヲ寺納セシメ、同寺ヲシテ、同寮ヲ再興セシム、

〔永源寺文書〕三 ○近江

當寺且過領事、近年寺家ニ依不相渡、退轉云々、太以無其謂、然間、彼領年貢被納所寺家、早速可被建立且過、尙以違亂之族在之者、一段可被仰付之由候也、仍執達如件、

永正拾六年九月十一日

高祐（花押）

永源寺

（春谷忠純）  
當住持

謹責使

山上且過領之事、近年寺家ニ依不相渡、且過退轉云々、太不可然、所詮、彼領年貢以下可致其沙汰永源寺、萬一於難澁者、可被入謹責使之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正拾六年九月十一日

高祐（花押）

高雄（花押）

飯高且過領

所々百姓中

周防守護大内義興、冷泉興豐ニ、同國熊毛郡新屋河内ノ地等ヲ充行フ、

〔萩藩閥閥録〕百二ノ二 冷泉五郎

大内義興ノ  
判

下

冷泉民部少輔興豐

可令早領知周防國熊毛郡新屋河内六拾石地、安富彈、正忠跡、同郡宇佐木保内三拾石地、宇佐木右馬允跡、都濃郡末武村六拾七石地、安富三郎跡、同郡豊井郷内五拾石地、波多野雅樂助跡、同所拾五石地、倉波又三郎跡、等事

右以人所宛行也、者早守先例、可全領知之狀如件、

永正十六年九月十一日

十三日、甲辰觀月御宴、當座和歌御會、

〔再昌草〕十九 ○宮内廳書陵部所藏 永正十六年己卯 六十五歳

十三夜、内裏にて題をさくりて、五十首歌講せられしに、

月前風勅題 （元長） 讀師甘露寺大納言、講師重經朝臣、發聲右衛門督、彼脚歌冷泉中納言謹之、（冷泉為和）

身にそしむ露ふかき夜の月影に吹ともみえぬ萩の下かせ

永正十六年九月十三日

四三七

熊毛郡宇佐木保内  
都濃郡末武村  
同郡豊井郷

三條西實  
隆ノ和歌



永正十六年九月十三日

四三八

瀧月

今夜猶名こそなかれて瀧のいとたへぬ光も月にそひけれ  
杜月

そめあへぬ柞のもりの秋の色月の桂の枝をかさはや  
故郷月

さもあらぬあれまそひ行軒はをも月にうらみぬやとの秋風  
月前衣

やとりけりおもふに月は心あれやわか身朽木の苔の衣手  
〔今川爲和集〕 〇宮内廳書陵部所藏 禁裏御當座侍時、御三間にてつかうまつりけ

〔永正十六年九月〕  
禁中月同十三日夜

冷泉爲和  
ノ和歌

月きよきけふの今夜の雲の上に玉しく庭の光そふらん

〔朱書〕 月前薄 きりはるゝ野もせの露をかすかにてお花か袖に月そうつるふ

月前席

思ふとち心をのこる小菫にかけさへやとる秋の夜の月

寄月怨戀

よしやさの夜よしと人にいひもせしといす八月の名をやくたさん

二十日、辛大隅肝屬兼憲、薩摩霧島社ヲ造營ス、

〔前編〕薩藩舊記雜錄 四十

〔山川郷〕一奉造立霧嶋御社一字

右意趣者、云々、大檀那伴之兼憲御息災延命云々、

永正十六年己卯九月廿日

鍛冶 孫兵衛尉

大工 助兵衛尉元吉

小工一人

大願主伴兼憲

〔参考〕

〔地理纂考〕

十四 薩摩 霧島神社  
顯桂郡 鳴川村

祭神瓊々杵尊、創建の年月詳ならず、棟札に永正十六年・永祿二年願主伴氏とあり、伴  
肝付氏と同族にて、往古山川を領す、

二十四日、卯、幕府、稻荷社目代羽倉兵部大輔ノ、足利義澄等ニ黨スル

永正十六年九月二十日 二十四日

四三九



永正十六年九月二十七日

四四〇

ニ依リ、其所領ヲ收メテ、之ヲ羽倉龜丸ニ充行ヒ、百姓等ヲシテ、年貢等ヲ龜丸代ニ進濟セシム、

〔羽倉文書〕

城〇山

羽倉兵部大輔事、去永正以來、御敵令同意、剩今度屬三好、  
被仰付候訖、早年貢・諸公事物并山林・寺庵・被官人・神役以下、如兵部大輔時、可被沙汰  
付龜丸代候之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正十六  
九月廿四日

秀兼

百姓中

○稻荷社祝羽倉五郎、義澄ニ黨スルニ依リ、幕府、其跡職ヲ兵部大輔及ビ五郎ノ子  
龜丸ニ與フルコト、七年五月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十七日、午、征夷大將軍足利義植ヲ源氏長者ト爲シ、淳和・獎學兩院  
別當ニ補ス、又權大納言甘露寺元長ヲシテ、民部卿ヲ、權中納言高辻  
章長ヲシテ、式部大輔ヲ兼ネシム、

〔公卿補任〕

六十

權大納言正二位藤元長、六十 加茂傳奏、九月廿七日兼民部卿、

從二位源義植、五十 征夷大將軍、九月廿七日補源氏長者・淳和獎學兩院別當、

消息宣下

消息宣下、

權中納言從二位菅章長、五十 九月廿七日兼式部大輔、

〔後法成寺尚通公記〕

十

九月廿七日、午、朝間小雨下、大樹兩院別當・氏長、三色

御禮也、公武一度歴々也、參賀衆、近衛尚通 下官・九條前關白・關白・左府・久我大納言・花山

院大納言・西園寺中納言等也、直垂、小倉大納言・甘露寺大納言・廣橋大納言・勸修寺

中納言・中山中納言・伯三位・山科三位・三條宰相中將・頭辨・飛鳥井中將・藤兵衛佐、

姉小路侍從・大藏卿以下十人計、法中、大覺寺・定法寺、武家、細川右京兆以下六七十

人也、

〔壬生家四卷之日記〕 一 九月廿七日、

淳和獎學兩院別當・源氏長者事、口宣二枚獻上之、早可被下知之狀如件、

九月廿七日

四位史殿

禮紙云、

進了、

上卿小倉大納言候也、

永正十六年九月二十七日

四四一

廷巨武將  
等幕府ニ  
參賀ス

上卿小倉  
季種



永正十六年九月二十七日

四四二

永正十六年九月廿七日 宣旨

權大納言源朝臣 義

宜爲淳和・獎學院別當、

右中辨藤原資定 奉

永正十六年九月廿七日 宣旨

權大納言源朝臣 義

宜爲源氏長者、

右中辨藤原資定 奉

權大納言源朝臣 義植

右中辨藤原朝臣資定傳宣、權大納言藤原朝臣季種宣、奉勅、件人宜爲獎學・淳和兩院別當者、

永正十六年九月廿七日

修理東大寺大佛長官左大史小槻宿禰時元 奉

宣下日時  
ノ勘進

權大納言源朝臣 義植  
右中辨藤原朝臣資定傳宣、權大納言藤原朝臣季種宣、奉勅、件人宜爲源氏長者、  
永正十六年九月廿七日  
修理東大寺大佛長官左大史小槻宿禰時元 奉

擇申氏長者并兩院別當宣下日時、  
今月廿七日戊午 時辰若巳、

永正十六年九月廿七日

正五位下行圖書頭兼權曆博士賀茂朝臣在康  
從四位下行陰陽頭兼博士賀茂朝臣在富

〔足利家官位記〕 惠林院殿義植

同十六年九月廿七日、爲源氏長者、補淳和・獎學兩院別當給、

○七月十一日、紀明直ヲ刑部少輔ニ任ズルコト等、便宜左ニ合敘ス、

〔賴繼卿記〕 ○歷代殘闕  
日記百所收

永正十六七十一

大學助紀明直 院廳也、

永正十六年九月二十七日

四四三



永正十六年九月二十八日 是月

宜任刑部少輔、

同八四

從五位下大中臣時宣

宜任民部少輔、

二十八日、未、己後土御門天皇聖忌、佛事ヲ山城般舟三昧院ニ修セララル、

〔拾芥記〕下 九月廿八日、後土御門院聖忌、於般舟院有御經供養、御導師花園、願

文、諷誦文、大藏卿和長、草進之、

是月、美濃守護代齋藤利良、朝倉孝景ノ援ニ依リ、越前ヨリ美濃ニ還ル、

〔東寺過去帳〕

於濃州、新四郎齊藤利良自越前入國時、兩方合戰、死亡輩數百人、

〔永正十六九ノ下旬比ヨリ、濃州ハ越前ヨリ新四郎入國、朝倉合力、同名孫八大將ニ

テ、山崎衆已下三千ハカリニテ合力、

○利良、土岐政頼ヲ擁シテ、越前ニ奔リ、孝景ニ頼ルコト、十五年八月十日ノ條

中東時宣

經供養  
導師房清  
東坊城和  
長願文諷  
誦文ヲ草  
進ス

入國ノ時  
ノ合戰

ニ、義植、孝景ヲシテ、政頼ニ歸國ヲ諭サシムルコト、同年十二月二十六日ノ條ニ

見ユ、

美濃守護代齋藤利良、同國汾陽寺ニ禁制ヲ掲グ、

〔汾陽寺文書〕一美濃

禁制

汾陽寺

一軍勢亂入狼籍事、

一軍勢押而執陣事、

一懸兵糧米事、

一伐採竹木事、

一放火事、

右若有違犯之輩者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

永正十六年九月日

藤原利良（花押）

軍勢ノ陣  
取  
兵糧米ノ  
賦課

永正十六年九月是月 二日 五廿



永正十六年十月二日 五日

十月小盡 壬戌朔

一日、壬戌御祝、

〔三水記〕

十月一日、壬戌天晴、日暖、○中晚著直衣參内、御盃入夜參、其儀如例、伏見宮中務

眞教親王卿宮令參給、知仁親王親王御方、聊御虫氣所勞、仍不令候給、

二日、癸亥亥子御祝、

〔三水記〕

十月二日、○中入夜參内、御亥子御盃如恆、知仁親王親王御方御不參、仍於御妻御所、

各令頂戴御嚴重了、

〔拾芥記〕

下十月二日、御亥子、

○本月十四日及ビ二十六日ノ亥子御祝ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔三水記〕

十月十四日、○中入夜參内、御亥子御盃如常、

廿六日、○中入夜亥子之御祝如例、

五日、丙寅權大納言正二位菊亭季孝薨ズ、

〔公卿補任〕

四十

權大納言正二位藤季孝四十十月五日、夜半イ頓滅云々、四十一才イ、

參 議從三位藤公彦、十四左中將、十月五日喪父、季孝

頓死

知仁親王  
御病ニ依  
リ御不參

御妻御所  
ニ於テ嚴  
重ヲ賜フ

鷲尾隆康  
玉冠等ヲ  
預ケ置ク  
息公彦ノ  
權中納言  
任官ニ奔  
走中ニ薨  
ズ

四十一歳

官歴

初名季直

永正十六年十月二日 五日

十月小盡 壬戌朔

一日、壬戌御祝、

〔三水記〕

十月一日、壬戌天晴、日暖、○中晚著直衣參内、御盃入夜參、其儀如例、伏見宮中務

眞教親王卿宮令參給、知仁親王親王御方、聊御虫氣所勞、仍不令候給、

二日、癸亥亥子御祝、

〔三水記〕

十月二日、○中入夜參内、御亥子御盃如恆、知仁親王親王御方御不參、仍於御妻御所、

各令頂戴御嚴重了、

〔拾芥記〕

下十月二日、御亥子、

○本月十四日及ビ二十六日ノ亥子御祝ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔三水記〕

十月十四日、○中入夜參内、御亥子御盃如常、

廿六日、○中入夜亥子之御祝如例、

五日、丙寅權大納言正二位菊亭季孝薨ズ、

〔公卿補任〕

四十

權大納言正二位藤季孝四十十月五日、夜半イ頓滅云々、四十一才イ、

參 議從三位藤公彦、十四左中將、十月五日喪父、季孝

頓死

知仁親王  
御病ニ依  
リ御不參

御妻御所  
ニ於テ嚴  
重ヲ賜フ

鷲尾隆康  
玉冠等ヲ  
預ケ置ク  
息公彦ノ  
權中納言  
任官ニ奔  
走中ニ薨  
ズ

四十一歳

官歴

初名季直

〔三水記〕

十月五日、○中半夜有扣門者、何事哉、消肝之處、菊亭亞相、俄及命終云々、

即玉冠等、在彼亭間、忿罷向、取出愚物等了、近日雖所勞、不被指惱、今急速之薨、言語

道斷、愁腸無限者也、今度右方親王代、菊亭公彦息黃門就出仕之奔波之處、如此義出來、不足言

者歟、如頓死也、仍不及一言云々、妄執令推察者也、予又別而爲知音之間、出仕具等令

談合了、俄仰天沉事也、四十一歳云々、可惜可哀、

〔歷名土代〕

從五位下 延德同季直、同元十二廿六、同日侍從、

正五位下 同季直、同四正六、

從四位下 同季直、明應同二、

從四位上 藤季孝、同八廿七、本季直、

正四位下 藤季孝、文應同元十、

〔公卿補任〕

參議從三位藤季孝廿四左大臣公興公男、母、延德元十二廿六敍爵、同日

侍從、十一才同四正六正五下、十四才一一一左少將、明應二一一從四下、同八年十廿七從

四上、子時文龜元四一正四下、一一一左中將、同二年二月廿一日敍從三位、石山院忠輔卿同日

之儀同前、左近中將如元、四月十三日任三木、永正三年十月十九日任權中納言、廿八、同五

永正十六年十月五日



永正十六年十月五日

四四八

年二月八日敍正三位、卅、〇以下、同十一年正月廿九日勅授、同日拜賀、前駟二人、如木一人、小雜色六人、七月二日任權大納言、卅、<sup>(正親町三條)</sup>、實望服解替、同十二年四月十九日、敍從二位、卅、同十四年十月四日敍正二位、卅、九、同十五年元日內辨、四十、〇以下、

〔諸家傳〕

三下 今出川

季孝 元季直、公興公男、母、文明十一年誕生、長享三年十二月廿六日從五位下、十一

歲、同日侍從、于時、

同四年正月六日正五位下、十四、年月日左權少將、明應二年月日從四位

下、十六、少將如元、

年月日左權中將、同八年十月廿七日從四位上、廿二歲、于時季孝、文龜元年四月

日正四位下、廿三歲、〇以下、公卿補任ト同ジ、キヲ以テ略ス、菊亭家譜異事ナシ、

〔尊卑分脈〕

藤原氏 公季孫 菊亭

公興

季孝 權大、正二、永正十六薨、

公彥 參木、左中將、左大臣、

公範 小松谷、

實曉 光明院、清水寺別當、

女子 權中納言源重親室、重保母、

〔菊亭家譜〕

世系

公興

季孝 元<sup>(季)</sup>直、侍從、左少將、左中將、三位中將、參議、中將、權中納言、權大納言、正二位、

公彥

公範 小松谷、

實曉 清水寺別當、光明院、

女子 權中納言源重親室、重保母、

〔二水記〕

永正十七年十月五日、早日詣菊亭、今日是音院一廻也、(季孝)五六許輩有齋、相

伴、於佛事者、於東山邊被修之云々、

享祿四年十月五日、於菊亭有齋、今日故亞相第十三回也、(號是恩院數イ)法事理趣三昧云々、不聽聞也、

可慚愧々々、僧衆泉涌寺也、安樂光院長老、其外他寺衆相交歟、(有之イ)八口者々、(宗山等實)萬松軒御出

座、(重親)庭田・予等相伴也、中酒傾數盃、施申マシ、(宗山等實)當時於所々爲此分、末世

之所爲也、可戒々々、

六日、町是ヨリ先、越後守護代長尾爲景、神保慶宗等ト越中境川ニ戰

ヒ、進ンデニ上城ヲ攻メ、事ニ依リテ歸國ス、是日、爲景、之ヲ畠山

尙順ニ報ズ、

永正十六年十月六日

四四九

一周忌  
是音院  
ト  
號ス

十三回忌



永正十六年十月六日

〔上杉家文書〕一

〔折封ウハ書〕(爲景)  
長尾彈正左衛門尉殿

〔編裏切封〕

〔高山御願〕  
卜山

四五〇

爲景富山  
ニ陣ス  
ニ上城麓  
ニ放火ス  
能州口ニ  
不慮ノコ  
ト出來ス  
尚順ノ褒  
美

去年之働、度々兩人雖令註進候、(永正十六年)十月六日之書狀、具加披見候、(越中)堺川一戰之次第、誠希代之名譽、不可有比類候、於真見・富山張陳、被勵軍功様躰、柴山藤兵衛尉委細申候、既二上之麓迄放火、彼城及落居計之刻、能州口不慮出來、無念此事候、兩口如此、云成立、云向寒氣、當年歸陣、無余儀候、行事當年へ被相延候、武畧註進之趣可然候、其國之衆、爲景家風各戰忠、尤感悅至極候、就其、以狀申下候、賴入之由、被加諷諫候者、簡要候、此刻之出陳、可屬本意之段必然候、惣國彌馳走可爲祝着候、神保出雲守・遊佐新右衛門尉、可令調談候、猶覆並三郎左衛門可申候、恐々謹言、

〔永正十七年〕  
正月廿七日

卜山(花押)

長尾彈正左衛門尉殿

〔別歷代古案〕十六

去年於越中軍功無比類候、寔喜入候、仍再興之儀、爲景申趣、彌馳走簡要候、諸口之行、委細神保出雲守・遊佐新右衛門尉可申候、穴賢々々、

山村藤三郎ノ軍功ヲ褒ス

〔永正十七年〕  
正月廿七日

卜山

山村藤三とのへ

畠山勝王ノ褒美

雖未申通候、一筆令啓達候、仍長々御張陣御苦勞、特節々被及一戰、御高名之由無比類候、就其、只今勝王(高山)以書札被申候、尙可然様御かせき憑入令存候、向後之儀、別而申談度覺悟之候、委曲使者可申候、恐々謹言、

八月十四日

能登守元近

山村藤三郎殿進之候

〔上杉家文書〕一

〔折封ウハ書〕(爲景)  
長尾彌四郎殿

〔編裏切封〕

勝王

今度於越中國、長々在陳、令祝着候、然處、不慮題目出來、無念至極候、乍去、各無事退出、快悅不少候、此儘可捨置事、外聞口惜候、爲景以入魂之趣、來春再興之義、可爲本望候、恐々謹言、

永正十六年十月六日

四五一

勝王長尾房景ニ再興ヲ依頼ス



永正十六年十月六日

(永正十六年)  
十月十九日

長尾彌四郎殿

勝王(花押)

四五二

今度之義、言語道斷次第、無念至極候、仍春已來、長々御張陳、殊種々御入魂、難謝之由候、依之、只今勝王以書札被申候、就中、再興之義、色々調法半候、猶向後之事、被憑入候外無他候、恐々謹言、

(永正十六年)  
十月十九日

長尾彌四郎殿進之候

能登守  
元近(花押)

(折封ウ、ハ、書(宗景)  
(備裏切封)  
長尾備中守殿

勝王

長尾宗景  
ニモ依頼  
ス

今度於越中國、長々在陣、祝着候、然處、不慮題目出來、無念至極候、乍去、各無事退出、快悅不少候、此儘可捨置事、外開口惜候、來春再興之義、憑入計候、恐々謹言、

(永正十六年)  
十月十九日

長尾備中守殿

勝王(花押)

今度之義、言語道斷之次第、無念至極候、仍去春已來、長々御張陳、殊種々御入魂之至、難謝之由候、依之、只今勝王書札并以使者被申候、就中、再興之義、色々調法存候、彌向後之計、被憑入候外無他候、恐々謹言、

(永正十六年)  
十月十九日

長尾備中守殿進之候

能登守  
元近(花押)

○爲景、畠山勝王ノ請ニ依リ、越中ニ出陣セントシ、之ヲ長尾房景ニ報ズルコト、四月二日ノ條ニ、慶宗等ヲ撃タントシテ、越中ニ出陣スルコト、十七年六月十三日ノ條ニ見ユ、

七日、辰仁和寺眞乘院大僧正宗一寂ス、

〔永正十三年八月日次記〕永正十六年十月七日、眞乘院僧正宗一、入滅云々、七十、余才、

雖老躰勿論不便之段、終之様躰、印明之儀、寄妙々々、

〔仁和寺諸院家記〕眞乘院宗一大僧正、本覺遍、心蓮院、信嚴法印重受資、永正十六

年十月七日入滅、七十餘、〇仁、和寺記録同ジ、

〔東寺過去帳〕

眞乘院大僧正 永正十六、仁和寺御室門跡院家、

永正十六年十月七日

四五三

七十餘歳

初名覺遍  
信嚴重受  
ノ資



永正十六年十月七日

〔尊卑分脈〕 藤原氏 公季公流 三條

實尙 改一教、  
改一量、

宗一 大僧正、真乘院、本名覺遍、

〔系圖纂要〕 三十一 藤氏二十五下

實光 本實量、又實教、又實尙、  
母水無瀬具景女、

宗一 本覺遍、大僧正、  
真乘院、

〔筆陳〕 下ノ二 ○保阪潤治氏所藏

和歌 筆蹟

世系



月前虫

宗一

秋深き月の夜すかにきりくすいつまてとてかかへになくらん

〔妙心寺文書〕 六

○山城

〔編纂者〕 宗一僧正之賣券

□賣寄進申畠之事

仁地寺内  
ノ地ヲ賣  
心寺ニ賣  
寄進ス

妙心寺敷  
地トシテ  
所望ス  
門跡ノ下  
知ヲ加フ

白署  
花押

合貳段大者、在所者、山城州葛野郡仁和寺之内、

四至 東妙心寺、西之限新堀、南限田、北限路、土御門通也、

右件畠者、寂勝院領内也、雖爲先祖相傳之院領、妙心寺爲敷地、玖段之外、重而依有所望、直錢六貫文仁、限永代妙心寺江攸賣寄進申、實正明白也、本券者、依有類地不副之、仍爲末代支證、目錄之破裏畢、但本文六通、真乘院有焉、猶爲後證被加門跡之御下知上者、於子々孫々、不可有違亂煩者也、仍爲向後、永代之賣寄進之狀如件、

永正七年 庚六月六日

真乘院當住

大僧正宗一(花押)

妙心寺侍者御中

〔參考〕

〔花押彙纂〕 釋家 宗一 之部



○妙心寺文書(山城)

永正七年六月六日賣券

永正十六年十月七日





○妙心寺文書六  
永正十三年八月二十九日寶券袖判

八日、巳大内記五條爲康二昇殿ヲ聽ス、

〔拾芥記〕下 十月八日、天晴、略中今日爲康昇殿事申入之、勅許、長橋奉書被出右中

辨資定、々々下知于極薦源諸仲云々、今夕則申御禮、

十日、辛即位式日時定竝ニ擬侍從定、尋デ、二十一日ヲ以テ即位式ヲ  
行ハントス、幕府、要脚不調及ビ世上騷擾ノ爲メ、延期ヲ請ヒ奉ル、  
仍テ、之ヲ延引ス、

〔公卿補任〕四十

左大臣從一位 藤實香、五十御即位日時并擬侍從定奉行、

參 議正四位上 同公兄、廿六、書擬侍從定文、

〔後法成寺尙通公記〕十 九月廿八日、未、晴、略中先日御即位日時定宣下次、他事

奉行轉法  
輪三條實  
擬侍從定  
文ノ筆者  
正親町三  
條公兄

小規時元  
日他事定  
日例付  
勘申ス

被付行事、先規相尋小規時元宿禰處、一紙註進如此、

御即位定日被付行他事例

寬平九年七月五日、有政、是日被定美濃國覆奏使并御即位擬侍從也、又有除目事、

安和二年八月廿八日、右大臣參入、被定申即位日侍從、又上皇頓給新并春宮坊官監

署除目事、又有太政大臣、如舊賜隨身・內舍人二人、左右近衛各四人勅書事、今日上

皇被奉謝尊號御書於內裏、使中納言兼家卿也、又太政大臣於職曹司、被定、諸司所御

別當座、

右所見如斯、

時元

時元宿禰、注進如此、

十月十日、未、晴、今日御即位日時定也、

〔三水記〕 十月二日、略中從日野有使者、來十日御即位日時定也、廿一日御治定由示

之、

三日、略中歸路之次、向廣橋亭、御即位間事申談了、聊又有盃酌、

九日、略中午後向中山亭、御即位間事申談、舊記次第等令披見、晚頭歸家了、

十日、略中秉燭之程、着直衣參內、今夜御即位日時定、同擬侍從定也者、爲見物令參候了、

日時定







永正十六年十月十日

四六〇

て、すこし披見し、折帡を笏にとりそへて、左廻して座にかへりて、揖して安座、笏を  
置き折土代を前にをき、横、硯をひきよせ、土代をひらきて、續帡をとりて筆を□めてこれを  
かく、書終て暫前に置いて、筆等を能調、硯を座下にをしやりて、土代并折帡等を懷中に  
入、定文を笏にとりそへて、揖して座を起て大臣の前さきのにいたる、ことし、笏をさきのきかへる、ことし、揖し  
土代等をたてまつる、□を□てとり□□□す、文の笏をとりてしりそきかへる、ことし、揖し  
て硯をハしめの所首を左二廻すををしあけてこれをく、大臣定文を見をはられて後、揖して座をく  
たりて沓をはき、揖して本座ことしかへり着、兩揖つねの

〔京都御所東山御文庫記録〕

丙二 大禮次第

永正十六年九月日、殿下御作進、來月御即位治定之間、以永享・寛正例被仰畢、於里内  
大禮之例爲今度初例、仍御次第之趣、被任群儀者也、非殿下一人之所意、是爲後規之  
範矣也、故日野亞相廣光卿云、次將之挂甲、舊記舊次第等誤用桂字、手篇・木篇書誤  
也、挂甲者ウチカケヨロキト讀也、挂字勿論也云々、予推之、挂字漢音ハクワノ音也、模  
對馬（模カ）ノ音ケ也、仍云挂甲也、以此音又書挂字歟、就音如此之誤出來也、挂字本字掛也、  
不可誤乎、

今度御次第清書、被仰中御門大納言宣秀畢、用桂字尤不審、

永正十六年十月 日、依御即位延引、得閑隙、近代次第令類抄畢、

大藏卿和長（東坊城）

○即位式ヲ行フコト、十八年三月二十二日ノ條ニ見ユ、

前太政大臣近衛尙通ヲ三宮ニ准ズ、

〔公卿補任〕四十

前太政大臣從一位藤尙通（近衛）、四十、前關白、十月十日十三日イ、可准三宮由宣下於陣、上卿公條卿（三條西）、

職事内光朝臣、

權中納言從二位同公條（三條西）、三十、十月十日略、准后宣下奉行、

〔後法成寺尙通公記〕十 九月廿七日（戊）、朝間小雨下、略、今日吉日之間、余以廣

橋大納言申入准后事之處、即勅許、祝着無極者也、即廣橋來申勅許之由、令對面勸一

盞、大藏卿同來、勸一盞、（東坊城和志）、就准后事申沙汰、廣許（竹原）遣光繼朝臣、

十月七日（戊）、晴、就准后宣下儀、廣橋亞相許（日野）遣書狀、

十日（辛）、晴、今日御即位日時定也、以此次准后宣下也、上卿帥卿也、爲其禮、以俊永兩（北水野）

種二荷遣之、祝着由有返事、今夜定及天明間、明日可祇候歟、但可爲時宜之由申送間、

明日可來之由申遣之、

永正十六年十月十日

四六一



永正十六年十月十日

十一日、壬、雨下、已剋許、(五社諸神)極薦、(小槻)時元宿禰、(押小路)師象朝臣等持參宣旨、即令披見、先於公卿座、光繼朝臣爲請伴給三獻、其後召出令對面、給盃、各太刀持、一腰遣之、申畏入之由、又進上御太刀、金、令對面、先詔書進上之、

勅、殷湯開帝功、求良弼於傅野、周文基王業、得賢佐於渭陽、依功勞增官階、古今之彝範矣、補政化預朝獎、攝關之佳摸焉、從一位藤原朝臣、(衛通)忠貞溢國家、才德聽宇宙、是故加褒章之禮、示崇尊之心、宜加年官年爵、一准三宮、又食邑三千戶、以內舍人二人、左右近衛、左右兵衛各六人爲隨身、兵仗、并賜帶仗資人三十人、如忠仁公故事、普告遐邇、俾知朕意、主者施行、

永正十六年十月十日

次外記宣旨

從二位行權中納言兼太宰權帥藤原朝臣公條宣、奉勅、從一位藤原朝臣、宜賜准三宮年官年爵、內舍人二人、左右近衛各六人爲隨身者、

永正十六年十月十日

掃部頭兼大外記造酒正博士河內守中原朝臣師象奉

次官宣旨

右中辨藤原朝臣資定傳宣、權中納言兼太宰權帥藤原朝臣公條宣、奉勅、從一位藤原朝

臣封、宜充給參仟戶者、

永正十六年十月十日

修理東大寺大佛長官左大史小槻宿禰時元奉

祇候人悉進上御太刀、

十二日、癸、晴、爲准后宣下禮、帥中納言、(宣小橋)理覺院、少弼資直等來、各令對面、從淨土寺以治部卿被賀、

十三日、甲、朝間小雨洒、晴、(兼輔)鷹司被送太刀、被賀准后、(實淳)德大寺以懷古被賀准后、被送太刀、

十四日、乙、晴、(五條路卷)菅宰相爲准后禮來、令對面勸一盞、從一條以町被賀之、自二條以月輪被賀之、各令對面、

十五日、丙、晴、廣橋大納言、(勘解由小路)在富賀准后禮、令對面、勸一盞、(伊原)從德大寺爲准后禮、三種二荷被送之、

十六日、丁、晴、從大覺寺以三上民部卿被賀准后、冷泉前中納言、(公尊)四辻中納言、(藤)鷲尾宰相、(重親)庭田中將、(藤久)高倉少將等令對面、勸一盞、

廿一日、壬、晴、冷泉大納言入道、(政隆)甘露寺左大辨宰相等、爲准后之禮來、令對面勸一盞、

廿五日、丙、晴、(高辻章長)菅中納言爲准后禮來、令對面勸一盞、

永正十六年十月十日



廿八日、巳、晴、中山中納言、爲准后禮來、令對面勸一盞、

〔三水記〕

十月十日、

○中略、即位日次及ビ擬侍從定ノコトニカ、ル、其條アリ、

然後准后宣下也、帥中納言着陣、奧、頭辨

仰々詞退、次起座移着端、執行及曉更之間、不見終而令退出了、無執心之義、可愧々々、

十六日、爲准后御禮可參近衛殿之由、近邊衆相觸、午後出了、冷泉前黃門・北殿・庭

田・高倉等同道也、乘物不合期之間、道之程各異躰也、於不斷光院改衣裳、着直垂參

了、則有御對面、盃酌二三反、各令沈醉、御鞠之遊、及昏色歸家了、

〔次第部類〕

○柳原家記録八十三所收

永正十六年十月十日歟、

准三宮次第

剋限上卿着陣、職事來仰々詞、從一位藤原朝臣、准三宮賜年官年爵食邑、內舍人兵仗、

任貞觀例、令作勅書、上卿端笏微唯、職事退入、次上卿移端座、令敷軾、次召內記仰勅

書事、其詞如職事、內記退入、次內記持參勅書草、入莒、上卿披見、授莒於內記、次上卿

起座、就弓場奏之、則被返下、上卿取莒授內記、歸着陣、次內記進莒、次上卿仰內記令

清書、次內記持參清書、次上卿起座、就弓場奏清書、則被返下、御畫有無、於此所見之故實也、返授莒於

內記、歸着陣、時剋遲々時、於弓場可取替耶、內記置莒退、次召外記問中務參否、次中

務來軾、上卿下莒、中務賜莒退下、若中務不參者、給外記、仰云、傳々へ、次上卿以官人召外記、外記參進、上

卿仰云、從一位藤原朝臣、准三宮、可給年官年爵、外記稱唯退入、次上卿以官人召辨、

准三宮陣儀ノ次第

辨參軾、仰云、從一位藤原朝臣、准三宮、可給封戶三千戶、辨退入仰史、次上卿召官人、令撤軾退去、

十一日、壬、足利高基、鶴岡八幡宮若宮社ヲシテ、祈禱セシム、

〔鶴岡神主家傳文書〕

祈禱事、近日殊可致精誠之狀如件、

(足利高基花押)

永正十六年十月十一日

(鶴岡八幡宮) 若宮神主殿

十三日、甲、敍位ヲ延引ス、

〔二水記〕十月八日、向中御門亭、有敍位習禮、晚歸家了、

十日、晝程向正親町亭、有敍位莒文之習禮、少時歸了、

十三日、陰、可有敍位儀之處、御即位依延引無其義、

〔拾芥記〕

十月八日、天晴、就可有敍位、於中御門大納言亭有習禮、予召具大內記

(五條) 爲康有習禮、

十三日、可有敍位之處、就有細川六郎澄元、可出頭之沙汰、被仰出武家御動座之儀、仍旁

永正十六年十月十一日 十三日

四六五

即位式延引ニ依ル

細川澄元ノ亂ニ依ル



永正十六年十月十四日

御延引也、

權中納言正親町實胤ニ帶劔ヲ聽ス、

〔公卿補任〕四十 六

權中納言正三位同實胤、三十、十月十三日勅授、

○四辻公音ニ帶劔ヲ聽スコト、便宜左ニ合敘ス、

〔公卿補任〕四十 六

權中納言正三位同公音、(應)三十、十月廿一日(略)勅授、

十四日、乙左近衛大將大炊御門經名ヲ罷メ、右近衛大將德大寺公胤ヲ

之ニ補ス、

〔公卿補任〕四十 六

内大臣正二位藤經名、(大炊御門)四十、左大將、十月日、辭大將、

權大納言正二位同公胤、(德大寺)三十、右近大將、十月十四日、轉左、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲三十九所收

十月十四日、とく大寺の右大將、左にてんにんの

事、(内光)日野より申さるゝ、御心えのよしおほせらるゝ、

日野内光ノ執奏

太刀馬ヲ進メ  
童名珍王丸

近衛尙通  
第日待

中務丞

十八日、○中とく大寺、大將てんにんの御れいに、下すかたにて御れいに御まいり、

義植、三河吉良三郎ノ、元服ノ祝儀ヲ進ムルヲ謝ス、

〔御内書案〕乾

爲元服之禮、太刀一腰・馬一疋青毛、給候、喜入候、依太刀一振進候狀如件、

永正十六

十月十四日

吉良ノ珍王丸之御事

三郎殿

(伊勢貞隆)同御調進

十五日、丙子、伏見宮貞敦親王御所御日待、

〔二水記〕十月十五日、入夜參伏見殿、待日了、

○近衛尙通第日待ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔後法成寺尙通公記〕

十月十五日、丙子、晴、○中今夜日待也、寶鏡寺・大祥院・繼

孝院・慈照寺・朝藏主・補藏主、

大内義興、周防得富興資ノ官途ヲ推舉ス、

〔得富文書〕○周防

中務丞所望事、可令舉之狀如件、

永正十六年十月十五日

永正十六年十月十五日

(大内義興)花押



永正十六年十月十七日

得富右京進殿

四六八

十七日、戊寅伊豆最勝院住持存齋洞、寂ス、

〔日本洞上聯燈錄〕八 最勝鳳菴英麟禪師法嗣

武藏長泉寺等ノ開山

豆州最勝大洞存長禪師、參鳳菴得其法、居第一座、(五年)明應丙辰、菴遷化、嗣補其席、室中舉藥山陞座、經有經師、論有論師、又爭怪得老僧問衆、衆各下語、不契、師代曰、黃金自有黃金價、終不和沙賣與人、晚年謝院事、經行至武州、士庶嚮其道邁、捨地建精舍、如骨島長泉・市河永福・菖蒲長龍諸刹、皆請爲開山、永正己卯十月十七日謝世、茶毘分靈骨、塔長泉・永福・長龍之三處、出天瑞運・海印義・壑雲巨三人、

〔伊豆國賀茂郡宮上村 最勝院舊記〕

二十日寂ストノ説

四代大洞存齋禪師、在任五年、武州之産也、明應二癸丑年、進斧本院、室中舉藥山陞座、經在經師、論有論師、又爭怪得老僧問衆、(衆腹力)各下語、不契、師代曰、黃金自有黃金價、終不和沙賣與人、同六丁巳年退院、而開關武州于長泉・長龍・永福・少林、遂至永正十六己卯十月二十日唱滅少林、出天瑞運・海印義・壑雲巨也、贊云、父英五彩鳳梧碧、子俾四山龍象欽、爭怪和沙剛賣弄、黃金元不換黃金、

〔日本洞上宗派圖〕

法系

最勝三	鳳菴英麟
世四	武州永福・長龍・長泉開山
世五	大洞存齋
世六	天瑞英運
世七	武州箕田實持開山
世八	永福
世九	壑雲玄巨
世十	長龍
世十一	海印繼義
世十二	長泉

大日本史料 第九編之九終

永正十六年十月十七日

四六九



補遺

永正十六年

○八月十五日、法印大僧都印融、武藏觀護寺ニ寂スル條、三八三頁、薄草紙第二重口決ノ次、

〔十八道眞言句義〕

○信濃佛法寺所藏

(奥書) 本三云長享二年<sup>戊申</sup>正月十六日、於武彘王禪寺、依諸弟子等之懇望記之、恐可爲末代重寶也、尤可秘藏、々々々々、

金剛佛字<sup>(字)</sup>印融

〔十八道眞言私抄〕

○下野金剛壽院所藏

(奥書) 文明十四五之年、十八道金界并台藏半分計記之、自然打綺之故、不記續之、而ニ諸弟子等、爲末代之重寶、可記續之由、致懇望之間、長享二年九月之比、抄續之了、

三寶院流末資 印融

秀憲<sup>(參拾)</sup> 仁歲

高野山小田原於大石藏坊書寫之、  
天文十九年<sup>(庚子)</sup>七月五日

〔十八道眞言私抄〕

○信濃佛法寺所藏

補遺 第九編之九

十八道眞  
言句義

十八道眞  
言私抄

十八道眞  
言私抄



長享二年<sup>(興書)</sup>申十月十三日、於武劬王禪寺抄之乎、凡付<sup>(書)</sup>當流、四度之次第、賴瑜抄、册、教舜抄、册、師傳抄、册、在之、然者此外<sup>(書)</sup>別而私抄、雖似無用、於彼抄等者、或<sup>(書)</sup>憲深、口說<sup>(書)</sup>記、或<sup>(書)</sup>意教、口傳<sup>(書)</sup>記<sup>(書)</sup>故<sup>(書)</sup>、道教大僧都御傳、一向無之、又彼抄等<sup>(書)</sup>、有<sup>(書)</sup>用不用、有取不取、今爲辨當流所用之筋目、恐々憚々所記之也、後弟可察之、

三寶院末學印融

天文十六年丁未、於于高野山無量光、一夏山籠時、以記者御自筆之本、憑他之筆功寫之、同一校并一々不審等、就院主檢校法印覺融院床下、奉傳受畢、夏十一、俗年三十歲求法弟子仙弘、印融移御自筆畢、

和州招提寺彌勒院

彌勒院仙弘、於伊勢朝熊之岳、求聞持法修行之間、此口決八帖數借下、條中<sup>(書)</sup>欲書留候所、可然料昏等無之、用意セントスレハ、其隙<sup>(書)</sup>移日月候間、俄<sup>(書)</sup>啖敷紙以、如形寫置者也、

三寶之冥覽有其恐、自然末代學人、以此等本書寫給者、可有料昏結構者也、

天文廿一年<sup>(壬子)</sup>六月上旬之比書之了、

英範

紙數表紙マテ四拾枚

羯磨會

○同條

<sup>(三八八頁、)</sup>兩部曼荼羅私抄ノ次、

〔羯磨會〕

○信濃佛  
法寺所藏

<sup>(興書)</sup>延德四年<sup>(壬子)</sup>仲春之候記、

梵語者、以御請來之梵字儀軌載之、漢明者、以延命院之金界真言舉之、句義者、或依略出經之譯語、或依古師等之句義記之也、若有誤失者、後弟刊筆而已

印融法印 <sup>(五十)</sup>八歲

〔文殊師利菩薩〕

○信濃佛  
法寺所藏

<sup>(興書)</sup>延德四年<sup>(壬子)</sup>三月廿一日記之、梵語者、以行請來梵字儀軌載之、漢明者、以延命院胎界次第舉之、句義者、多分依大疏解釋、少分依古師句義也、凡於真言者、字義・句義、專可習學處也、然當時悉以習絕也、爲此道盡心勞眼、粗記之了、

三寶院末資印融 <sup>(五十)</sup>八

本云天文廿三年<sup>(甲申)</sup>三月廿三日、於根來寺、圓聖房御本申請、實宥書之、

○同條、<sup>(三九四頁、)</sup>十住心廣名目<sup>(六ノ次、)</sup>

補遺 第九編之九

文殊師利  
菩薩



補遺 第九編之九

〔護摩句義抄〕

○信濃佛法寺所藏

〔與書〕本云 永正八年辛未九月上旬之比、依弟子之所望記之、

印融七十七

于時天正六年丁戌二月廿八日書畢、

龍寶寺實宥法印御本ヲ申請畢、

求品澄濟

筆者實澄

○同條、三九七頁、

〔初〕初心問答鈔ノ次、

〔兩部合行略次第〕

○下野金剛壽院所藏

〔與書〕

永正十二年乙未八月十五日、依弟子等所望記之、印融八十一才

〔本云〕

元龜二辛未九月廿五日、八幡別當金剛院江予移住之砌、坊主持參之間、懇意爲殊勝自書

寫了、同廿八日、早本ニ寫之、重而可清書者也、

金剛子 堯雅

○同條、同頁、護摩私記ノ次、

〔胎藏界句義抄〕

○信濃佛法寺所藏

〔與書〕記者印融八

○同條、三九八頁、文筆問答鈔ノ次、

〔反音極學抄〕

○高野山正智院所藏

〔內題下ノ注記〕印融記之、

〔梵漢反音抄〕

○東大寺圖書館所藏

文明十四年壬寅仲秋之比、爲令誘引於幼弟、依信範之傳抄之、

悉曇末學印融

○同條、三九八頁、寶生院經藏圖書目錄ノ次、

〔三四反切私抄〕

○川瀨一馬氏所藏

補遺 第九編之九



〔奥書〕本云文明十九年丁未初冬之頃、爲松壽稽古、令草案之、

同延德三年辛亥初秋之頃、重而令再治了、

印融記之、

右此本者、湯淺正胤秘藏、而雖不被出袖中、此道相傳之次、頻致懇望、及一見、依而无比類、重寶押拭老膜、如形之樣、令草案所也、臆而相調紙墨筆者、致清書者、努々不可及他見者也、穴賢々々、印融記之畢、

〔本云〕天文十五年三月十八日

于時元和六年申五月十一日、刻、高野山清淨心院坊にて良弁書寫之、

雖辱惡翰爲廢學、三月半日之間、墨筆塗付候間、彌々淺間敷候、乃去寫本落字損字、太方書直之歟、及校合可被嘲噤者也、下野宇都宮ノ内鹽谷莊寺山鏡音春秋四八歲

〔梵漢配合〕○高野山金剛三昧院所藏

〔奥書〕本云文明十八年丙七月廿五日記之、

悉曇末學印融

長享三年卯十月廿三日快傳書之、

亮任房長算廿七

明應二癸丑曆中冬九日、於高野山書寫之畢、

永智良恩四十

○同條、四〇六頁、韻鏡ノ次、

梵漢配合

三十三年  
忌佛事  
門弟ノ願  
文

〔誦經草案〕

○武藏寶生寺所藏

敬白

爲印融法印第卅三回追孝奉修万タラ供願文事

夫以、隆崇タル妙高、難ク見其頂ル、渺漫タル溟渤、巨窮ル其底、雖然可攀其高、亦有量其深、伏惟、先師法印、融玉儀者、提甫撫育之慈海、勝超父母庭訓之丁寧、難謝罔極之恩澤、伏反尤厚之德海也、常歎、林焉之微禽、有反甫之孝、泉瀨之愚獸、致祭奠之誠、何況受生於人身、豈无報謝、念乎、依之修胎金兩部之万茶羅供養、伏願廻此勝功、報彼恩德、尊ニ上綱、轉ニ惠日、竭ニ愛河、早ニ超ニ凡境、彌ニ憎佛位、給ニ而已、

天文十四年三月廿四日

護持法主敬白

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施一裘

恭聞、恩、重、嚴師之恩、法寂不如密藏云々、先師上綱、幸括囊兩部之法味於舌上、灌沐數輩之末資於甘露、照長夜之迷室、導常樂之覺路、其恩其德、厚而反甫無由、嗚呼、

補遺 第九編之九

七

同諷誦文



痛哉々々、數行汎瀾弟子、哀悼<sup>タク</sup>餘思<sup>リニ</sup>惟<sup>スラク</sup>、合會<sup>スルモノハ</sup>有<sup>スル</sup>離生<sup>者</sup>必殞<sup>インス</sup>、然則老師<sup>トシ</sup>幡幡<sup>トシ</sup>命則如蜉蝣<sup>〔備カ〕</sup>、  
從<sup>トモナレシ</sup>伴寸烟<sup>ニ</sup>已來、星霜改變<sup>ノ</sup>、佳城<sup>カセイルカニ</sup>遂隔<sup>レリ</sup>、拜<sup>セシ</sup>其恩顏<sup>ヲ</sup>、亦何時乎<sup>レノツ</sup>、興悽愴<sup>之痛</sup>、泣<sup>ミ</sup>々欲營<sup>ル</sup>、  
報恩誠、是故<sup>ニ</sup>附法遺弟等、延嘔數口僧徒、調万茶供養之儀式、并書寫御經造立塔婆、  
當印融法印第三十三回之忌景嚴重也、庶幾、乘斯白善、開五智本有殿、遊九尊性蓮宮  
給、作善之志趣、盖以如斯、敬白、

天文十四年<sup>〔題〕</sup>沾洗廿四日

護持遺弟等  
白敬

○同條、四〇六頁、  
花押彙纂ノ次、

〔印融乘牛畫像〕

○武藏三  
會寺所藏

畫像  
龍剛ノ贊

<sup>〔上段〕</sup>武州烏山三會寺開祖印融大德の壽像、朽敗におよひ、今年修補なりて、予に開眼あら  
ん事を願しゆへ、入眼供養して稱讚し侍りぬ、

法の師の古にし影に色添てなを後の世のしるしとそせん  
いさほしの今なを高く烏山に群れ集て仰く影の清けき  
星移肖像古、加彩徳光新、入眼爲何支、冥然如在神、

安永三甲午年九月日

南山寶門主前左學頭老杜多 龍剛(花押)

<sup>〔下段〕</sup>歸敬本初不滅阿、來降此土今還往、命終一念淨心彌、迎臨三尊忽現生、頂戴蓮臺越惡  
陀、引登月殿座遇極、禮恭稱讚拜諸佛、攝受恒常住快樂、  
生是不生々、滅是不滅々、鎮居阿字臺、當聽變文說、  
印融法印大和尚位

昔永正十六

<sup>〔畫像下ノ修理略〕</sup>

嘉永五年壬子八月十日、大風起于東南、拆木掀屋、當山論講義學之道場、頃年新成美盡  
矣、此支院檀越、二十餘年畜積而所經營也、今也不能抗於一颺而頽矣、或云、司事者、貪  
戾賤匠賊之故、工不密技不精、雖然天災耳、明日衆聚撤之基陛、頽毀椽椳差脫、若鑄若  
埋、支離八分、清濁方混沌、獨融師之木主及影像、冥然乘牛、儼然擁筆、穗毫無所損、  
皆非威靈乎矣、謹而補綴標裝、以表章事由、  
巽方一陣張雲旅、突兀飛簾急指揮、百萬喊聲山岳動、十千連弩汰沙霏、虹梁獅座既摧  
骨、天柱地維將折機、獨有真身無礙僧、遺馨尙存木蘭衣、

觀護幻住眞王拜記 ○表積裏書高野春秋  
ニ同ジキヲ以テ略ス、



第九編之九  
(以下為極淡之印刷文字，內容難以辨識)

大日本史料 第九編之九

昭和二十九年三月三十日發行

豫約價 八百圓

編纂者 東京大學史料編纂所

發行者 東京大學

發賣所 財團東京大學出版會

著作權所有

振替口座 東京五九九六四番  
電話小石川(92)〇八八〇番

印刷 興進社 小張淺五郎  
コロタイプ印刷 株式會社 大塚巧藝社  
製本 株式會社 松岳社



法  
律  
學  
科

東京大學出版會  
發行所  
東京市丸の内區  
本郷三丁目

東京大學出版會

東京大學出版會

東京大學出版會

昭和二十六年三月三十日發行

定價 八百圓

大日本史料 第六卷之二



